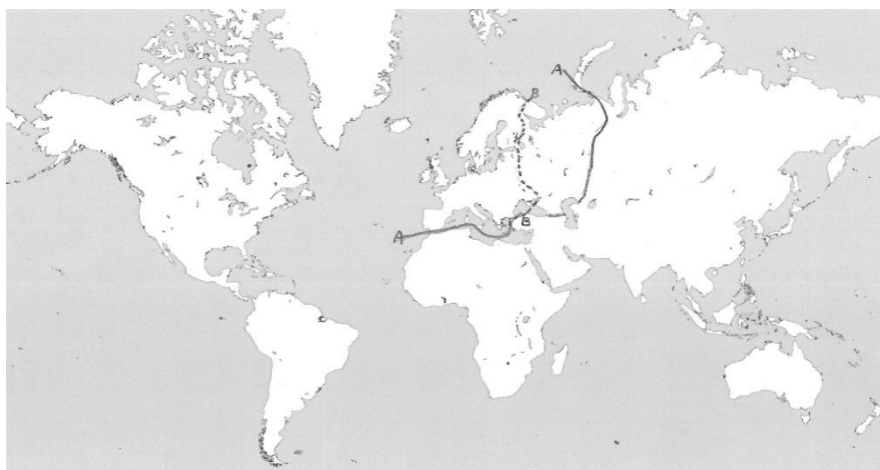


3 節 ヨーロッパ

(1) 狭いながらも多様なヨーロッパ

国連による世界地理区分によると、ヨーロッパは北極海、大西洋、地中海、カスピ海、黒海、カフカス山脈、ウラル山脈に囲まれた地域（下図 A～A）で、ユーラシア大陸のおよそ 20%、全陸地の 6.8%を占めている。ここには当然旧ソ連と現在のロシアの領土も含まれている。この地域を除くとヨーロッパは更に狭くなりユーラシア大陸の 12%（下図 B～B）ほどになってしまう。

この狭いヨーロッパが実際よりも広く、大きく感じられるのは、ヨーロッパの国々が、これまで世界で果たしてきた政治や経済の影響力に加えて、日頃目になっている世界地図が原因の一つと思われる。私たちに馴染みの世界地図といえば、緯線経線が直線で直角に交わり、日本が真ん中で東に太平洋、その端に南北アメリカ大陸があり、西にユーラシア大陸が広がり、ヨーロッパとアフリカを西端とするものである。地図の中心をどこにするかは別にして、メルカトル図法を改良したミラー図法による地図である。



地球の表面を正確に表しているのは地球儀だが、全地表面を一度に見ることはできない。何よりも持ち運びが不便である。それらを改良したのが地図である。しかし、地球の表面が球面で、地図は平面である。

ミラー図法により地図のひずみは、面積と距離と方位に現れる。

帝国書院 ヨーロッパ中心の世界の地図に作図（ミラー図法）

例えば、面積と距離は、緯度が高くなるほどひずみが大きくなる。例えば高緯度のグリーンランドの面積はオーストラリア大陸の 1/3 以下であるが、オーストラリアよりも大きく表現されるし、南極大陸は地図の南端いっぱいに広がってしまう。赤道が通るアフリカ大陸に比べると北緯 45～50 度を中心のヨーロッパはかなり拡大表現されている。さらに、地図帳の地図は同じスペースにヨーロッパもアフリカも収められるので縮尺が異なってくる。アフリカよりも小さなヨーロッパがアフリカより大きく表現される場合が多い。このようことが重なり、拡大されたヨーロッパが無意識のうちに私たちの脳裏に刻まれている。狭いところに多種多様な民族、言語、文化、さらには郷土色が強い国家が入り混じって、ひしめき合うのがヨーロッパである。

農業と食生活

ドイツを中心とするヨーロッパ北部の農牧業は、夏らしい夏のない涼しい気候と氷河による薄い表土という地理的環境から家畜の飼育と穀物、根菜類や牧草の耕種を組合せた混合農業が一般的である。牧畜の方が容易であったことから、動物に依存した食生活が定着し、収穫量の少ない穀物は脇役となった。

いろんな肉料理や乳製品には地域的な特徴が見られる。ハンバーグはドイツのハンブルグの挽肉料理、ローストビーフはイギリスの伝統料理、フランスのポトフなどが思い浮かぶ。肉や乳の保存用として加工されたハム、ソーセージ、チーズ、ヨーグルトも、ヨーロッパの北から南にかけて古くから存在し、その種類や形は千差万別である。穀物は麦類で主にパンに加工される。しかし、原料である麦類の種類が多く、パンの種類も様々である。フランスのバケットやクロワッサン、イギリスのイギリスパン、ドイツはライ麦パンを中心にスペルト小麦などの古代麦のパン、デンマークのケーキのようなパン、イタリアの細長くあっさり塩味でクラッカーの様な歯ざわりのグリッシーニ、スペインの細長く硬いピストラーなどなどパン文化の歴史が感じられる。

ヨーロッパ南部のスペインは、地中海性気候で夏季の3ヶ月間はほとんど雨が降らない。従って、乾燥に強いオリーブ、レモン、オレンジなどの果実類が栽培される。料理としては、中東から伝わった香辛料を大量に使った料理が多い。また、海産物と野菜や米を材料にしたパエリアや、オリーブやトマト、ジャガイモ入りの厚い玉子焼き、スパニッシュオムレツが知られているし、マヨネーズは地中海に浮かぶマジョルカ島、スペイン語のマヨルカで航海用の鶏卵保存食として古代から伝えられたものである。イタリアでは良質な小麦や野菜、乳製品を使ったパスタ(*)やピザなど、お国柄、地域性が色濃く残っている。

協道にそれるが、ヨーロッパの食生活が優れていることを裏付けるものがある。アメリカの総合情報サービス会社ブルームバーグが、2019年度の「健康な国」を発表した。169カ国の平均寿命などに基づいてスコアを算出し、喫煙や肥満などのリスク要因を減点、公衆衛生や飲料水などの環境要因を考慮したという。世界で健康な国トップ10は、①スペイン、②イタリア、③アイスランド、④日本、⑤スイス、⑥スウェーデン、⑦オーストラリア、⑧シンガポール、⑨ノルウェー。⑩イスラエルで、6カ国がヨーロッパの国が占めている。その大きな要因が食生活だという。参考までにアメリカ35位、中国52位。



街角のスタンド式飲み屋（ポルトガル）



スタンド式肉売り場（スペイン）

(*) イタリアのパスタは法律で定められている

イタリア人の食べものといえば、誰でもスパゲッティやマカロニが思い浮かぶ。その種類何と300種以上もあって、深い味わいをもつとされている。このようパスタをつくるため、イタリアでは法律で「乾燥パスタにはデュラム小麦のセモリナ(荒挽き粉)のみを使用し、人工着色や保存料などの添加物を使用しない。卵入りパスタの場合はデュラム小麦100g中に5個以上の卵を加えなければならない」と定められている。なお、パスタは、小麦粉を練ってつくるイタリア発祥の麺類の総称。太さや長さ、形によってスパゲッティ、マカロニやラザニアなどに分かれる

労働慣行

「日本人はウサギ小屋に住み、ひたすら働いている」これは EU の前身である EC、ヨーロッパ共同体の報告に述べられたものである。ヨーロッパと日本の労働時間や休暇を比較してみると当然と思えてくるが、ウサギ小屋云々は、ヨーロッパよりはアメリカと比較の方が正しいような気がする。

年間の総労働時間が最も短いのがドイツで 1,598 時間である。日本はようやく週 40 時間労働が始まった。それでも年 48 週として 1,980 時間で、その差は 382 時間である。1 日の労働時間の 8 時間で割ると 48 日、およそ 2 ヶ月近くも短い。この違いは、週当たりの労働時間もさることながら、年間の休日日数が大幅に少ないことになる。働く人々には 1 年間に定められた日数を消化しなければならない休暇、年次有給休暇がある。ドイツでは法律に基づき「休養のための休暇」を連続 12 日間取るようになっている。フランスは最低連続 2 週間を義務としている。ロシアは最低 28 日の夏休みが法律で定められている。

労働慣行にも違いがみられる。近年、日本でも職能給などの変化はみられるが、企業や官公庁に就職すると、勤務年数とともに昇給、昇格するのが一般的である。そして、不況時には高齢者に退職勧告や肩叩きがあり、給料の安い若い労働力で補う傾向にある。

これに対して、ヨーロッパは初めから職種別採用で、仕事の内容を厳しく定めて採用する。契約した仕事だけを行う分業が徹底している。給料も職種別に決められており、異なる部門への転勤、昇格はない。雇用者が人員整理を行うときは、勤務歴の浅い従業員から対象になる先任者優先制度が一般的である。従って、若者の失業が大きな社会問題となる。

外国人労働者

ヨーロッパの資本主義国側、西欧にとって大きな問題の一つが難民と労働移民である。EU の中で最も多くの外国人労働者が働いているのがドイツで、イギリス、フランスと続く。多くの外国人労働者を受け入れた社会背景には第 2 次世界大戦後、西欧諸国は製造業を中心に経済復興を遂げた。1960 年代からの経済発展は労働者不足を生み出し、積極的に外国人労働者を受け入れてきた経緯がある。

ドイツの外国人労働者受け入れ政策はガストアルバイター、英語のゲストワーカー政策といわれ、カナダなどの定住型移民とは異なり、数年後には本国に帰る労働者であった。しかし、契約期間後も就労先の国に留まる労働者が続出し、その数は増え続けた。ところが、1973 年のオイルショックで経済状況は冷え込み、ガストアルバイター政策は中止となった。失業者数の増加と共に外国人労働者の排斥運動が起こり、イギリスの EU 脱退運動の大きな引金になっていく。

エネルギー

ヨーロッパ各国の生活水準は、世界でも有数の高いレベルである。従って、エネルギー消費量も多く、国民一人当たりで換算すると、日本とほぼ同じかそれ以上である。ドイツなど石炭資源に恵まれた国もあるが、ヨーロッパのエネルギー源は石油中心である。ヨーロッパ全体の原油輸入量は世界最大で、輸入先は中東や北アフリカの国々、及びロシアである。油田の開発から精製、流通、販売に大きな力を持っているのが国際石油資本、メジャーで、1960 年の石油輸出機構、オペック結

成までは世界の石油市場を独占していた。その後、1973 年と 1979 年の二度にわたる石油危機、オイルショックを経てオペックが急速に力を増してきた。これに対抗して 1990 年代の後半からメジャーの合併が進み、スーパーメジャー（アメリカ系、イギリス・オランダ系、イギリス系、フランス系の計 6 社）として今日に至っている。しかし、先進国のエネルギーの転換や航空、自動車の燃費改善で石油需要が低下傾向にある。

発電方式を見ると、北欧では水力発電の割合が高く、石炭に恵まれたドイツやイギリスでは火力発電の割合が高くなっている。更に、フランスのように総発電量の 70%を原子力に大きく依存している国もあり、国によりかなりの違いが見られる。

原子力発電では旧ソ連のウクライナで起きたチェルノブイリの事故、東京電力の福島原発事故が記憶に新しい。2011 年、東日本大震災で起きた福島第一発電所事故後、その処理対応で右往左往している状態が続いているにもかかわらず、2013 年、東京オリンピック招致最終プレゼンテーションで「状況はコントロール下にある」と世界中の人々が見ているテレビで当時の首相が言い放った。放射能は人知の及ばない厄介なものであることははっきりしている。また、発電すれば核のゴミが必ず出る。その処理が見切り発車で、最終処分場すら決まっていない現状である。

大陸別石油輸入量（2013）



（２） EU（European Union — ヨーロッパ連合）

2002/3、アルプスで氷河スキーを楽しんだ。スイス入国後、車でフランスに移動しシャモニーで投宿。翌日、スイスのプチコンバン（3,672m）からボウベ氷河を滑って、イタリアに入りヴァルトナンシェに宿を取った。すなわち、フランスの宿を出て、スイスでスキーを楽しみ、イタリアで宿泊と 1 日で 3ヶ国を移動した。パスポートの提示は 1 度もなく、3カ国で使用した通貨はユーロ（スイスは EU 未加盟だが、スイスフランとユーロ併用）で、国境や国を意識することは全くなかった。



戦後、資本主義と社会主義の両雄アメリカとソ連が対立、1980 年代の日本はバブルの絶頂期であった。一方、ヨーロッパは第一次、第二次世界大戦の舞台となり、多数の犠牲者を出し、貴重な文化財を失い、悲惨な戦争はもうこりごりというのが正直な気持ちであった。加えて、経済は停滞し、アメリカと日本経済の進食を食い止めるのが精一杯で、ただ耐え忍ぶ時代が続いていた。このヨーロッパ経済の立て直し策が EU、ヨーロッパ連合であった。経済面での国境をなくて、ヨーロ

ッパが1つ共同体になればアメリカとソ連、日本と肩を並べられ、世界への影響力が期待できると考えた。

EUの前身であるEC、ヨーロッパ共同体は、ヨーロッパ経済共同体（EEC）、ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体（ECSC）、ヨーロッパ原子力共同体（EURATOM）が、1967年に統合されたものである。更に一層の統合を進めるため1993年に発効した「ヨーロッパ連合条約」、マーストリヒト条約によってEU、多数の国々が集まって1つの国のように活動する地域共同体が発足した。具体的には、加盟国内のもの（物資）、お金（資本）、人（労働）が自由に行き来できる単一市場を目指し、単一通貨導入による経済通貨統合と共通外交、安全保障政策の実施に踏み切った。

加盟国はフランス、ドイツ（当時西ドイツ）、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグの6カ国だったが、

1973年 イギリス（2016年離脱決定）、アイルランド、デンマークの3カ国

1981年 ギリシャの1カ国

1986年 スペイン、ポルトガルの2カ国

1995年 オーストリア、フィンランド、スウェーデンの3カ国

2004年 ポーランド、ハンガリー、チェコ、スロバキア、スロベニア、エストニア、ラトビア、リトアニア、マルタ、キプロスの10カ国

2007年 ルーマニア、ブルガリアの2カ国

2013年 クロアチアの1カ国



以上28カ国が加盟する「経済的、政治的な連合」である。本部はベルギーの首都ブリュッセルである。EUの主な決定機関は理事会で、各加盟国に持ち票が割り当てられおり、賛成国の合計人口約4億09,200万人の62%以上と決められている。

左：ヨーロッパ連合旗 青地に12の金色の星が円環状に配置されている。これは「完全無欠」、「永久」を意味しているという

今後の加盟候補国は、トルコ、クロアチア、マケドニア、アイスランドの4カ国。トルコについては、クルド民族に対する人権問題、更に、ヨーロッパはボスボラス海峡までのイメージが強く、この基準によるとトルコの国土のたった3%に過ぎない。それにイスラム教の国であることもネックになっている。これに降って湧いてきたのがイギリスの離脱問題であった。

EURO (€ : ユーロ)

US\$のように世界で広く使える通貨に育て、ヨーロッパ経済を活性化させる考えから生まれたのが、ヨーロッパ単一通貨「ユーロ」(€)である。言葉では「ヨーロッパ」とひとまとめにできるが、内部は多種多様な民族、言語、国や地域、文化が入り混じっている。国内においても頑なまでの郷土色で、国内を二分する独立運動が持ち上がるほどである。このように個性が強く、まちまちな国民気質の国々が、法律、通貨、議会を一つにするヨーロッパ統合は容易なことではない。なかでも通貨統合は、EU加盟国が最後まで悩み抜いた問題であった。

1999/1/1 に達成したが、2001 年までは国際取引の決済通貨で、帳簿上でのみ使用されていた。そして、2002 年元旦からユーロが通貨として使用できるようになった。現在、オーストリア、ベルギー、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、アイルランド、イタリア、ルクセンブルグ、オランダ、ポルトガル、スペイン、スロベニア、スロバキア、エストニア、ラトビア、リトアニア、キプロス、マルタの 19 カ国（2019）で導入している。

しかし、スウェーデン（2003 年国民投票で参加否決）、デンマーク（1992 年及び 2000 年の国民投票で通貨統合を拒否^(*)）、イギリス（2016 年、国民投票で EU 離脱決定）、他にクロアチア、ハンガリー、ルーマニアなど 9 カ国は EURO に参加していない。その一方で、EURO 非導入国でも結構通用しているし、EU 非加盟国でもユーロを使用している国、スイス、モナコやバチカンなどがある。

（*）ユーロ参加によって社会保障、雇用制度などが損なわれるのではないかと危惧などが主な理由

紙幣と硬貨

紙幣は 5 ユーロから 500 ユーロまで 7 種類で、「ヨーロッパの時代と様式」というテーマでデザインされ、ヨーロッパに共通する文化遺産を象徴的にあらわした架空の建築物が描かれている。EU の開放性と協力の精神を表す「窓」と「門」、裏面はヨーロッパ市民同士、ヨーロッパと世界の外の地域とのコミュニケーションの象徴を表す「橋」が描かれており、種類ごとに大きさや色を違えて見易くなっている。

一方、硬貨は 1 ユーロ、2 ユーロそして 1、2、5、10、20、50 ユーロセント（100 ユーロセントで 1 ユーロ）の 8 種類。片面はユーロ参加国共通、もう片面は各国独自のデザインでユーロ参加国の協調と独自性を表している。図柄は違って、大きさ、重さ、色、厚さ、縁の形状によって、どの額面の硬貨であるかを容易に区別できるようになっている。



ユーロはルネサンス建築のデザイン

5 コイン

ユーロの経済効果

現在、EU、ヨーロッパ連合加盟 28 カ国中 9 カ国がユーロを採用していないが、これほどの規模で通貨が切れかえられたのは史上初めてである。これにより、期待される経済効果は、ユーロ圏内で取引は全てユーロ決済となる。為替リスクなしで取引や資金調達ができるためビジネスの活性化が期待される。金利やインフレ率も低く抑えることが出来るとみられている。ユーロ圏とそれ以外の地域との取引に於いても、ユーロが広く使われ始めている。

ドル追撃の一番手とみなされた円は日本経済の低迷で勢いを失うなかでドル、円、ユーロの本格的な三極通貨体制に入った。ところが、ここにきて中国が人民元の国際化を強めており、ゆくゆくはアジアの基軸通貨とし、世界的にも日本円を押しつけドル、ユーロ、人民元の三極通貨体制になるのではとの見方もでている。

旅行していてもメリットを実感できる。例えば、フランスで使い残した硬貨をイタリアで、ギリシャで利用できるなど、国境を越える度に厄介で、目減りする両替の必要がなくなった。

イギリスのEU 離脱

イギリスは 2016/6 の国民投票で、離脱支持 51.89%、残留支持 48.11%という僅かな差で EU 離脱を決めた。オバマ米大統領ら各国の指導者が残留を求める中で選択だった。ジョンソン前ロンドン市長をはじめとする離脱派の主張は、表向きには「国としての主導権を回復する」だが、本音は「これ以上移民、難民を受け入れはご免」というのが本音である。ヨーロッパではほとんどの国で、シリアやイラク、北アフリカの国々からの難民受け入れ問題が生じている。難民にとって社会保障が手厚いイギリスは人気国である。正式な手続きを踏んで難民として受け入れられれば、福祉手当という金銭が与えられ、無料で医療施設を利用でき、住居が与えられる。イギリスに行けばなんとかなるということで多数の移民、難民がイギリスを目指すのである。

EU加盟国には、難民受け入れを拒否できないという法律がある。移民についても、特別な理由がない限り拒否できない。ギリスが移民や難民受け入れを拒否、あるいは制限するには、EU を離脱するより術がないのである。難民の衣食住の費用は国の税金で賄われる。イギリス国民が不満を持つのも当然である。加えて、移民が増えると雇用も大きな問題になる。移民はイギリスに来て仕事をする。もともとあった仕事をイギリス人と移民で奪い合いになる。さらに、他国の文化が入り混じることによるイギリス古来の文化が失われ、治安の悪化などの懸念も叫ばれている。

三度の離脱延期後、EU の前身 EC に加盟して以来 47 年間ぶりに、2020/1/31 をもって正式に離脱を決めた。今後のイギリスの舵取りが注目される。

<イギリスやオランダって何語?!>

日常生活で当たり前口にしてしているイギリス、オランダ、ドイツなどは、地図帳にも国名として記入されている。ところが、インターナショナルツアーの自己紹介などでこれらの国名を聞くことはない。

例えば、イギリスは「イギリス」ではなく、ユナイテッド キングダム (United Kingdom)、またはアルファベットのみの UK、あるいはイングランドとかウェールズなどカントリー名となる。イギリスの正式名は、「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」(United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland) である。

オランダはライン川下流の低湿地帯に位置し、国土の多くはポルダーと呼ばれる干拓地で、国土の 1/4 は海面下の国である。オランダ人はネーデルランド (Nederland) と呼び、「低地の国」の意味である。英語表記ではネザーランドス (Netherlands) で「オランダ」ではない。

ドイツ人はドイツランド (Deutschland) と呼び、英語表記はラテン語の Germania、ゲルマン人の地に由来したジャーマニ (Germany) である。ところが、フランス人やスペイン人はアルマ

ーニュ（Allemagne）、イタリア人ではゲルマニア（Germania）となり、日本のドイツとは似ても似つかぬ言葉であった。

日本語のカタカナ表記は外来語、外国人名、外国の地名、擬音語などだが、これらの国名は外来語に日本の歴史が加味された結果の国名で、日本だけで通用する特別な言葉となったのだろう。

ヨーロッパの地域性

ヨーロッパは多種多様な国、地域、民族、言語や文化などが入り混じった複雑な地域である。この地を単純に地域区分するのは不可能であるが、地理的な位置から北欧と南欧、冷戦時代の資本主義国と中立国側の西欧に対して当時のソ連の影響下にあった国々を東欧とし、旧ソ連やロシアを除いた狭義のヨーロッパを対象にした。勿論、その基準は時代により、民族や地理的な位置により、あるいは歴史などにより異なり、あるいは重なり合い単純ではない。

【資料】 パーティーに関わる国民性ジョーク

10 分前に来るのは日本人、時間丁度に来るのはドイツ人、10 分遅れがイギリス人、30 分遅れる

のがフランス人、1 時間遅れるのはイタリア人、その時まだ寝ているのがスペイン人

北欧 — フィンランド共和国、スウェーデン王国、ノルウェー王国、デンマーク王国、アイスランド共和国

北欧5ヶ国は、人口が最大のスウェーデンでさえ 1060.7 万人（2024 年）といずれも小国であるが、1 人当たり GNP は世界のトップクラスの水準である。一口に北欧と言っても各国毎に特徴がある。例えば、フィンランドはヨーロッパの中の人種島で、もともとアジア系民族であるし、隣接しているソ連の影響を強く受けてきた。

ノルウェー、スウェーデン、デンマークの3国はいずれもバイキングの血を引き、14 世紀以降しばらくの間は同じ君主の国であった。現在でも文化的にも近く、言語も似ている。スウェーデンは高度な技術で高品質な工業製品を生産し、酪農が中心のデンマークというように経済構造はそれぞれ国毎に違っている。

各国民の長所をうまく言い表した言葉に「フィンランド人がデザインし、スウェーデン人が作り、ノルウェー人が運び、デンマーク人が売る」がある。



シラカバの瘤で作ったカップ（フィンランド）

フィンランド（フィンランド共和国）

フィンランドはオーロラと、サンタクロースとムーミンの国で、国土の 1/4 は北極圏に属する。国名はかつて支配していたスウェーデンによる呼称で「フィン人の国」の意味。自分たちは「スオミ」、湖の国と呼んでいる。平等と自主性を重視した教育大国で、教育水準は常に世界トップクラスで知られる。

＜エストニア タリンからヘルシンキへ＞

INTREPID Travel 社の ” Trans-mongolian Express” は、北京集合、サンクトペテルブルグ解散の 21 泊 22 日のツアーであった。その後、独り旅が始まった。バスでエストニアのタリンに入り、その後フェリーでヘルシンキに移動した。

ソ連崩壊の呼び水となったのはバルト 3 国の独立であった。その最も北に位置しているのがエストニアで、首都タリンはフィンランド湾を挟んでヘルシンキと向かい合っている。旧市街の南、ワバドゥセ、自由広場に出ると真っ先に飛び込んできたのはエストニア独立戦争戦勝記念碑だった。タ方からは内部のライトでやわらかな乳白色に輝いていた。この歴史は国旗にも現れている。上から青、黒、白の三色旗で、中央の黒は故郷の大地と暗黒時代の悲しい歴史を忘れないための決意を示しているのだという。

タリンの旧市街地は城壁に囲まれていた。石畳の広場と通路は磨き抜かれ、家屋をはじめ建物は手入れが行き届き、大きな歴史博物館の中を歩いている感じだった。旧市街は、かつての支配者たちが居を構えた「山の手」のトームペアと、商人や職人たちが住んだ「下町」に分かれてた。そして、旧市街がそっくり世界遺産に登録されている。歴史を刻んだ建物が並び通りと城壁は、そのまま店舗や倉庫、レストランやホテルとして利用されていた。石畳の細い通路と階段、何処からも見える尖塔、見晴らしの良いところからの景色は明るい色彩で、何処を切り取っても絵になる街だった。ここがつい 20 年ほど前までソ連の一地方都市だったとは信じ難い。幸いなことは、潜在的に脳裏に焼きついている社会主義にまつわる何となく暗い、近づき難い、密室的なイメージは感じられなかった。多くの観光客が行き交うバルトの窓としての地位を確実に築いている様に見受けられた。

タリン港 D ターミナルに向かう。11:00 の出航 45 分前から乗船が始まった。タリンとヘルシンキ間を 2 時間で結ぶ TALLINK のスーパースターを見て驚いた。船の中央には明るいレストラン、免税店があり、内部は広く立派だ。先年、南米の南端、ウスワイアから南極大陸への時に利用したロシア船籍オルロバ号より遥かに豪華だった。乗客は定員の半分くらいだろうか、でも、収容人数が 2,080 名と記されていた。朝から雷をともなった雹と氷雨の天候だったが、船は揺れることもなく、ヘルシンキ西ターミナルに入港した。

＜北緯 60 度＞

フィンランドの夏は 20:00 をまわってもまだ明るい。ヘルシンキは北緯 60 度、スウェーデンの首都ストックホルム、ノルウェーの首都オスロとほぼ同じ緯度である。北緯 60 度を東にたどっていくとカムチャツカ半島、アラスカ半島の付け根部分にあたり、グリーンランドの南端部と同じで、日本では考えられない高緯度である。気候区分図を見ると、内陸よりのヘルシンキは辛うじて北海道と同じ冷（亜寒）帯になるが、ストックホルム、オスロは温帯気候である。北欧 3 都市の 7 月の平均気温はヘルシンキで 16.9℃、ストックホルム 17.4℃、オスロは 17.1℃である。日本で 7 月にこの気温になるのは北緯 42 度から 45 度の稚内から網走あたりである。北緯 60 度とはいえ北欧は日本人が想像する以上に暖かい。



＜バルト海の乙女＞

フィンランドに限らず北ヨーロッパ諸国は、世界でも社会福祉が充実していることで知られる。過去に国論を二分するような危機も数多くあったが、それでも福祉国家の実現に向けてたゆまぬ努力を続け、他の国々が軍備拡張を最優先した時期にも、国の未来を担う子どもたちの健康と健やかな成長を最も大事な政治課題としてきた結果だという。

木々の生い茂るエスプラナーディ公園への入口に、噴水と4頭のオットセイに囲まれた「バルト海の乙女」、ハーヴィスアマンダの像が立っていた。気品と美しさ、優しさを表しているといわれているが、それはそのままヘルシンキの別名でもある。そして、この優しさが世界的な社会福祉へつながったとされている。その表れが、全国で24時間の医療体制が整っており、apteekkiと表示された薬局も輪番



バルト海の乙女像

体制で24時間開いている。個人的なことだが、年末年始の山行初日の12/31、山麓でテント泊の夜中に熱湯で足を火傷した。当然、医院も薬局も締まっており、手持ちの医薬品では心もとなかった。幸い消防署から湿布薬を分けてもらい応急手当でしのいだことを思い出す。話は少し逸れるが、市内の観光案内所でもらったシティーマップに、目立つ二色刷りでレストルームが沢山記入されていた。

カンピョッピングセンターとホテルの間に集合住宅が並んでいた。そのテラス部分が、ガラスかプラスチックに囲われ、サンルームのようになっていた。アジアなどの同緯度に比べて温かいとはいっても、冬の寒さと風対策なのだろう。先年、カナダのカルガリー中心部の建物は、厳しい寒さ対策として空中回廊で結ばれており、外に出ることなく殆どの用事を足すことができた。寒さ対策のお国柄、生活様式を垣間見た感じだった。翌朝、空港バス乗場に急いだ。気温5℃の寒さは綿パンを通して伝わってきた。バスは丸みを帯びた巨岩の切通しを2度、3度と通った。空港への道路は、氷河の置き土産を切り開いた道路であった。

＜美術館と海の幸＞

ヘルシンキ中央駅東側の緑地帯前のアテネウム美術館に入った。建物は重厚で歴史を感じさせるものであった。入口正面の大階段を上がっていくとホールで、雰囲気は抜群だった。フィンランドの古い絵画などが中心だったが、ムンクやゴッホ、ゴーギャン、ルオーなどの作品があり、見応え充分であった。モスクワのプーシキン記念美術館、サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館と、わずか10日の間に3カ所で近代ヨーロッパ絵画に巡り会えるのも旅ならではのこた。

ストックマンデパートからヘルシンキ大聖堂、元老院広場、大統領官邸、ウスペンスキー寺院と歩き、最終目的地がマーケット広場と倉庫のようなレンガ造りマーケットだった。土産物屋台に並んでいた木製のトナカイ、どっか人間らしくもあり可愛らしさにひかれて記念として買い求めた。

ザックにしまい込む時、エストニアのタリンでトナカイ肉の缶詰を買い求めていることを思い出し、自分のいい加減さに苦笑いするしかなかった。多くの屋台で魚を売り、黄色と茶褐色の茸のみを並べている屋台もあった。そもそもこの市場の起源が、海産物と農産物の物々交換だったというから「海彦、山彦の北欧版」といったところだろうか。屋内マーケットにはお土産店、簡易食堂、カフェ、魚屋、惣菜店などなどいろんな店が入っていた。先ほど生唾を飲んだサーモン売場に引返し、黒胡椒、マリネ、レモン、ハーブ、スモークのサーモンを、それぞれ1枚ずつスライスしてもらい脂の乗った美味さを噛みしめた。



スウェーデン（スウェーデン王国）

＜政府専売酒店＞

2月、スウェーデンのドゥントレットのコテージに泊っている時だった。週末、スウェーデンの若者たちで急に賑やかになった。ホテル棟のサウナも昨日までののんびりムードは消えた。脱衣室、シャワー室、サウナ室がなんとなく雑然となり、ビール瓶が散乱し、ゴミが目立つようになった。スウェーデンも青少年問題で頭を悩ませている様子で、アルコールと犯罪から守ることが当面の課題だという。そういえば、アルコール類は市内の政府専売酒店で、用意された用紙に種類と量を記入して、売ってもらう感じだった。街頭の自動販売機からいつでも、誰でも買える国とは大違いだ。

隣のフィンランドはアルコール中毒患者を収容する建物まで用意されており、夕方になると無料で収容してくれるのをあてに昼からアルコールをあおる人々が絶えないとも聞いた。アルコール問題は、どうも北欧全体の問題らしいが、高度な福祉国家でもアルコールに頼らざるを得ない人々が居るということは、どんな福祉政策も所詮人の心までは救えないことを語りかけているのだろうか。

＜食の許容範囲＞

北欧の宿は大抵朝食付きである。日本でいうバイキングスタイルで、スモーゴスボードと呼んでいる。スウェーデンのドゥントレットで10連泊したコテージは、ぼそぼそのパンにこれでもかといわんばかりのチーズとハムの種類と量、数種類のコーンフレーク類。ミルク、コーヒーと紅茶にハーブティーの数々。魚の酢漬けや魚の卵の塩漬け、それに高さ30～40cmの瓶が4～5個並んでいた。瓶の中身はとろりと滑らかで美味しいヨーグルトだった。炊飯器のご飯もあったが、芯があり、お粥もどきであった。わずかに色づいたトマトはごつごつとした肉厚のピーマンを硬くしたような味だった。考えてみると、真冬の北海道と同じ気候の宿である。地元の人々が日常食べている以上のものが豊富に並んでおり、昼食の分まで食い溜めができる量と味に満足していた。裏山でスキーをして帰ったら、ホテル棟に日本のタイヤメーカーの横断幕が掲げられ、大型バスから降りてくる日本人の団体が目に入った。

翌日の朝食は俄然にぎやかになった。耳に飛び込んでくる日本語は、食事への不満の声だった。確かに、日本や東南アジアの国々のような食材の豊富なところと比べたら味も見た目も見劣りする。

満腹のお腹を擦りながら席を立とうとした時だった。前に立ちはだかった日本人が、「ヨーロッパの食事はこんなものだよ」と口にした。彼等は一泊でいなくなったが、今日もまた何処かで同じことをぶつぶついつているのだろうか。日本人はいつから中国人やフランス人のように、食の「中華思想」に染まってしまったのかと考えてしまった。食は許容範囲が広ければ広いほど旅の楽しさは倍加されると思うのだが。



ガラスの彫り物と毛皮細工（スウェーデン）

<アイス ホテル>

スウェーデンのキルナから東に 16 km離れたユッカスィエルヴィに冬季限定のアイス ホテルが出現する。世界のアーティストによって造られるもので建物は勿論、内部の教会、バーのカウン



アイスホテル入口とホテル内の教会（ホテル入口の扉と教会の椅子にはトナカイの毛皮）

ター、椅子、コップからシャンデリアなどなど全てが氷でつくられていた。ホテル前のトルネ川が凍結し、そこから切り出された氷でつくる芸術作品である。氷のベッドにはトナカイの毛皮が敷かれ、寝具は寝袋で 1 泊 15,000 円と高額だった。若い頃、冬山で何回か雪洞を利用した。2 日目より 3 日目と利用日数が増えると天井や側壁の凹凸が無くなり、水滴が落ちなくなり快適さを増す。悩みはメモ帳や本が膨らんでしまう湿気である。また、トイレの匂いが籠ったことを思い出し、ホテルの対策が気になった。

<犬橇>

橇を引くハスキー犬やアラスカ犬は、ロープをつける準備段階から走る気満々で声を出し激しく動き回っていた。先ほど、犬橇についての話と注意事項の説明があった。橇と犬のつなぎ方はダンデムタイプといい、2 頭ずつ縦のラインにつなぎ、犬に指示するマッシャーと呼ばれる操縦者が一

緒するという。繋ぎの防寒具を着込み、手と頭は冬山の出で立ちで外に出た。先頭を走るリードドッグの目は鋭かった。他の犬が落ちつかないなか凜として座り込み、リーダーの風格が備わっていた。2 番目の列はスイングドッグと呼ばれ力強さと走力が求められるという。3 番目はチームドッグで、最後尾がホイールドッグの 8 頭立てだった。2 と 3 番目の犬は走る前、走りながらも良く吠えた。他の犬を鼓舞することが役目とでも思っているのだろうか。

合図と同時に勢いよく走り出した。木製の橇は至ってシンプルな作りで、後部にブレーキがある。予想をはるかに超える速さで乾燥した空気が顔に刺さる。樅木の茂る平原をひたすら走る。犬たちに走らされている感じはない。その逞しさに感心せざるを得なかった。

雪原に建てられた帆布の大きな三角錐のテントで、焚火を囲み暖かい飲み物で冷えた体を温めた後、再び走り出した。興奮余って走りながらうんちをする犬もいた。ホイールドッグに蹴散らされるとともに飛んできた。

走り終えた犬たちの大半は雪上で転げまわっていた。橇から解放された犬は人懐こく近寄ってくるものもあれば、自ら檻に入るものあり、走る前のとのギャップが可愛かった。ご褒美はカチカチに凍った肉の塊だった。



<イエレヴァレ鉄山と輸送路>

ラップランド^(*)空港内に「ヨーロッパ鉱業の中心地イエレヴァレへ ようこそ!!」と大きな看板があった。夏に「鉄山ツアー」を実施していることを知り、フロントで鉄山見学を申し出た。2 月は?! …の返事だったが、スウェーデン国営企業 LKAB から OK!! の回答を得た。

学生の頃、ここは露天掘りだったことが頭の片隅にあって、イエレヴァレ鉄山イコール露天掘りのままで現役時代を通してきた。露天掘りの跡は直径 6km の大きな窪地となり、その端にスキージャンプ台が設置されていた。

社名のプリントされた青のつなぎ服に着替え、ヘルメットにゴム長姿でワゴン車に乗り込んだ。坑内の幅 10m 近い舗装道路を一気に海拔 -540m まで降った。坑道は幹線から枝葉のように分かれており、総延長 300 km になるという。坑道の最先端の採掘現場は、何と -1,000m を越える地下だった。坑道の天井に伸びるクレーン車のような機械があり、天井一杯に直径 15 cm 程の穴が掘っ

てあった。爆破で崩して鉱石を運搬するのだという。足元に転がる鉄含有量 60～70%はずっしりと重かった。

鉄鉱石の輸出路は、夏季はボスニア湾最奥、ルレオからバルト海経由だが、冬季は凍結するのでノルウェーの不凍港ナルヴィクからノルウェー海経由となる。港まで鉄鉱石を運ぶための鉄道が、北極圏を走る世界最北のオーフォード線である。



坑内の気空のきれいなメンテナンス工場

(*) ラップランド

スカンディナヴィア半島北部からコラ半島にかけての地域で、伝統的にサーミ人が住んでいる地域。スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、ロシアの4カ国にまたがる。フィクション作品ではサンタクロースの住む場所とされている

<北極圏を走る鉄道> — オーフォード線

2000/2、イエリヴァレ郊外のスキー場ドウンドレットにオーロラ見たさにやってきた。北極圏^(*)に100 km入ったラップランドの一角である。オーロラに驚嘆の声を上げ、北極圏でスキーを楽しみ、ヨーロッパ最大の鉄山イエリヴァレの坑道最深部まで入り、犬橇で遊んだ後、フィヨルドを見るため世界最北の鉄道^(*)でノルウェーのナルヴィクに向かった。

オーフォード線はノルウェーの地方名に由来し、港町ナルヴィクからスウェーデンとの国境駅まで40 km、ノルウェーでの呼び名である。スウェーデン側は、内陸に産出する鉄鉱石をルレオ港に運ぶためのもので単にマルムバナシ、鉱石鉄道と呼ばれている。

極北の大地には、細く背丈の低い針葉樹が大地に遠慮しながら茂っていた。根元には必ずといって良いほど大地に帰る倒木と雪まみれの岩石があった。動くものは雪面を走る風と雪だけだった。時折り人家が見えるが、立木同様人間もまた荒野に間借りしている感じだった。この光景を前にして、いろんな言葉が浮かんできたが、「荒涼」が最も相応しく思えた。この荒野を生活の舞台とする限り、スキーが必然的に誕生したことに納得した。スキーのふるりの移動手段としてのスキーはノルディック種目として引き継がれ、スキー場内にコースが整備されていた。

帰省するスウェーデンの学生とキルナから一緒になった。故郷のアビスコから始まるトレッキングルートは、入山料も許可証も不要、国立公園外なら何処でもキャンプができ、しかも無料、小川の水は飲めるといふ。美しい山岳ルートで、トレールの王様という意味を込めて「王様の散歩道」、クングスレーデンと呼ばれ、北極圏470 kmのスウェーデン随一の人気コースだと説明してくれた。アルコールがびっしり詰まった大きなリックを背負ってアビスコ駅舎に消えて行った。

国境のトンネルを過ぎるとフィヨルドが視界に入ってきた。車窓から見る限りナルヴィクはフィヨルドの最深部に位置しているようで、氷雪をまとった岩山に囲まれていた。駅舎は黄色い建物でノルウェーの、ということはヨーロッパ最北で、北極圏に220 km入ったところだった。

(*) 北極圏 北緯66° 33' 以北の地域。1年のうち少なくとも1日は白夜、極夜が現れる

(＊2) 世界最北の鉄道はオーフォード線から、ロシアのサンクトペテルブルグとムルマンスクを結ぶムルマンスク鉄道、さらにヤマル半島を縦断する北緯 70° 19' のオブスカヤ ボヴァネンコヴォ カルスカヤへと更新された。しかし、親しみやすさからすると最北の鉄道はやはりオーフォード線である

＊ 西欧 — ベルギー王国、フランス共和国、ルクセンブルグ大公国、オランダ王国、オーストリア共和国、ドイツ連邦共和国、リヒテンシュタイン公国、スイス連邦、アイルランド、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国

＜イギリスとドイツ＞

冬のロンドンは 7 時になってもまだ暗い。冬の雨はいつ降り出すか解らない。でも、日本のように 1 日中しとしとと降ることはいないし、大粒の雨が数時間も降り続くこともない。ロンドンの年間降水量は 758 mm で東京の約半分、庄内の 1/3 である。これが毎月平均して降るから月降水量は 50～70 mm 程度である。傘なしでコートの襟を立てしのげる雨量なのでバーバリーの布地を生んだ。また、イギリス生まれのサッカーやラグビーが雨でも試合が行われるのもイギリス流雨の降り方による所が大きく、日本の様な雨降りなら当然中止となる。

ドイツ北部のハンブルクは、エルベ川河口からほぼ 100 km 内陸に入った港町である。背後に北ドイツ平原が広がるが、かつて氷河が運んできた砂礫に覆われ、土地はやせており農業には不向きなため牧草地として利用されてきた。家畜の排泄物を肥料にして、家畜飼育と作物栽培を組合せた農業、混合農業を生み出した。現代では肥料などが発達したため土壌の問題はなくなり、大規模に農業ができるようになったが、ライ麦などの麦類、ジャガイモを栽培し、豚や牛、鶏やアヒルなどの飼育する形態は今も残っている。ドイツというとビール、ソーセージ、ライ麦パン、ジャーマンポテトが思い浮かぶが、どれもドイツの農産物と重なっている。混合農業の南、氷河に覆われなかった地域は、レス^(＊)に覆われ肥沃な農耕地となっている。

ライン川沿いにルール、ザール工業地帯がある。エッセン、デュイスブルグ、デュッセルドルフなどの工業都市が連なるヨーロッパを代表する工業地帯である。これを支えている一つが、ドイツとフランスの国境を流れる国際河川のライン川の水運である。

(＊) レス 黄土と同じで、沙漠や氷河に堆積した岩粉が風に運ばれ堆積したものである。
華北地方、ヨーロッパ中部から東部にかけて、北アメリカ中央部に分布

＜ドナウ ライン川の船旅＞ — 即断念

西ヨーロッパの気候は「西岸海洋性気候」で、年間を通して平均した降雨で、河川の水量は安定している。加えて地形的に傾斜が緩やかなため多くの河川が水運に利用されてきた。なかでも、ライン川はアルプスに源を発し、ドイツ、スイス、オーストリアとの国境にあるボーデン湖を経てドイツを流れて、オランダで北海に注ぐヨーロッパを貫く大河である。一方、ドナウ川はドイツのシュバルツバルト(黒森)に源を発し、ドイツ、オーストリア、スロバキア、ハンガリー、クロアチア、セルビア、ルーマニア、ブルガリア、モルドバ、ウクライナを流れて黒海に注いでいる。この二つの

河川を結ぶ「ライン マイン ドナウ運河」、別名「ヨーロッパ運河」が、1992 年に開通し、黒海と北海を結ぶヨーロッパ東西交通の主要なルートとなった。

チェコ、オーストリア、ハンガリー、ルーマニアなど東欧の旅を模索している時、二つの河川を結んだリバー クルーズが目にとまった。ルーマニアとオランダ間およそ 3,000 km のヨーロッパ横断 23 日間である。東欧、西欧 9 か国の文化の変遷と東西文明の出会いを体験できる壮大なものだ。早速、パンフを取り寄せてみた。船室は全て 2 人用で独り者同士のシェアは認められていなかった。そして、客の 70~80%がアメ



ドナウ川を行くリバークルーズ船

リカ人で占められていることを知った。乗船した方の話では乗船中のチップがかなりの金額になることを知り、自分には到底手の届かない高根の花であることを悟った。

スイス（スイス連邦）

＜ヘルヴェティア（Helvetia）ってどこの国？＞

年末が近づくと微笑ましい図柄の切手のカードが届く。また、長期休みの終わり頃になると、少し汚れたものが辺境の地より舞い込んでくる。このような切手を 1 枚、また 1 枚と集めているうちにかなりの数になっていた。それらの中に“HELVETIA”の切手があり、「どこの国だろう？」と思ったことがあった。差出人がアルプスでの山登りに行っていることを思い出し、改めてカードに目を通してみると「Switzerland にて」と記されていた。スイスの公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の 4 つである。4 か国語を記入するスペースがない切手などの場合は、ラテン語のコンフェデラツィオ（盟約者図）ヘルヴェティア、ローマ時代の呼び名を国号として共通使用していることを知った。



＜アルプスで氷河の後退を見る＞

4,807m のモンブランを最高峰に、4,000m の山々が連なるアルプスは、海底に堆積した砂や泥の地層が、新期造山運動で隆起した山脈である。そして氷河に侵食された山々はマッターホルンのような岩峰に、谷は絶壁状の深い U 字谷となった。高峰は今も氷河に覆われ、岩と氷の世界である。およそ 1,800m の森林限界の上は、アルプスの名称の元になったアルプと呼ばれる放牧地がひろがり、移牧が行われているが、冬季にはスキー場へと変わる。

2002 年、アルプス オートルートの足慣らしでエギーユ デュ ミディからモンタンヴェールまで氷河を滑った。ところが、スキーを脱いだ氷河の標高が 1,400m、モンタンヴェール駅の 1,913m までは、400 段の階段とテレキャビンで登らなければならなかった。駅舎にあったおよそ 100 年前、鉄道が開通した頃の写真には、駅前を氷河が流れていた。現在の氷河と駅との比高 500m は、氷河の後退を示すものであった。



駅前を流れる氷河（駅舎の写真から）

<アルプス オートルート>

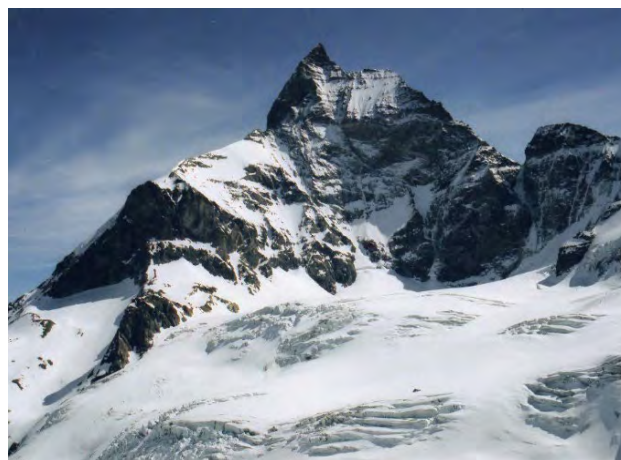
日本山岳会のアルパインスキークラブの有志で、2003/3 ヴァノアーズ山群からヴァリア アルプスの「アルプス山岳スキー縦走」を計画した。縦走といっても設備の整ったアルプスでは、ロープウェーとスキーリフトをフルに利用して稜線まで登り、スキーで山小屋に滑って宿泊の繰り返しである。

ヴァリス アルプスの3,200mに建つビニエット小屋は小さく見えるが、内部は意外と大きく100人収容だという。背後の数100mの絶壁を利用して、別棟のトイレがあった。便器の下は断崖で、排泄物が氷河に散乱していた。時折吹き上げてくる強風は、無防備状態の衣服をばたばたと煽った。お国柄だろうか、数種類ものワインが揃っていた。主食はパンだが、これも数種類から選べた。スープに始まり、スパゲティ、シチュー、デザートチーズまで出てきた。食事の間、フランス語、ドイツ語、英語、日本語が飛び交った。

今日は、ツェルマットを目指しての滑降だが、その前に3,500m級のコル、峠を3つ越えなければならない。5時、ヘッドランプの灯りを頼りに出発した。二つ目のコルがスイスとイタリアの国境、モンブルーレのコルである。傾斜がきつくなった後半は、スキーを担ぎつぽ足で登った。幸い、雪が適度に締まっていたので難なく登りきった。最後はベリーヌのコルで、今度はイタリアからスイスに入る。全く意識することない国境越えであった。息を弾ませ登りきると、4,478mの三角錐のmatterhorn と4,171mのダンデランの姿があった。コルは別世界への入口、期待感を彷彿



オートルート出発点 シャモニーからのモンブラン



ベリーヌのコルからのマッターホルン北壁

させるところだった。見上げるマッターホルン北壁の岩と氷に飾られた威厳に満ちた姿に圧倒され言葉を失った。未明に小屋を出て6時間を要していた。これからマッターホルン西面を見ながら遙かツェルマットまで続くツムート谷の滑降である。崩れそうなセラック、雪崩で落ちた雪塊の中を駆け抜け15時、10時間の行動を終えた。

＜氷河滑降＞ — 標高差 4,580m、滑走距離 50 km

目の前にはモンテ チェルピノ、イタリア名マッターホルンが朝の明るい陽光を浴びて聳えていた。今日は、アルプス第2の高峰、モンテ ローザの一角からの滑降である。メンバーはガイド、コーディネーターと日本山岳会アルパインスキークラブ6名の計8名である。

女性パイロットのヘリコプターは、風を避けるためか崩れかけた蒼氷のへばり付く岩壁すれすれのスリリングな飛行コースをとり、アルプス最高所 4,556m に建つマルガリータ小屋の前まで運んでくれた。幸い、頭のふらつきなどの高山病的な症状はなかった。

モンテ ローザはイタリアとスイスの国境に横たわる幾つかのピークをもつ山群である。当初、登頂後の滑降を予定していたが、時間的に無理ということで、直ぐにスキーを履き始めた。足元のグレンツ氷河を挟んでリスカム、その彼方にマッターホルンなど個性豊かな百嶺千山が連なっていた。その美しすぎる光景は、逆に自然の恐ろしささえ感じてしまうほどであった。ガイドが「今日のマッターホルンがパイプをふかしている」とポツリと呟いた。地元では、山頂から東に向って雲が湧くのは好天の兆しの言伝えがあるという。

出発前コース確認をかねて広げたスイスの地形図は、コピーにもかかわらず品格のある色彩、精密な地形描写による立体感、青の等高線で示された氷河は氷の動きまで記されており、その繊細さから岩と氷の山々の姿が容易に浮かび上がってきた。地図の域を超えた芸術作品に思えた。

天高くそそり立つマッターホルンに向って滑り出した。見た目には一面雪に見えるが、クレパス帯にさしかかると、ガイドからトレースから外れないようにとの指示がとぶ。3,750m のゴルナ氷河合流点で、スキーを履いたまま小休止した。氷河上では何処にクレパスが隠れているか解らない。



少しでも危険回避の手段がツボ足にならないことだという。スキーと登山の兼用靴とはいっても、足首が前傾しておりリラックス状態には程遠く、弾んだ息を整えるだけの休息である。

氷河の合流は河川水のようにすんなりとはいかない。不気味な蒼氷の氷塊が重なり、押し合い押し出されている。そして、これらが圧倒的な規模で不安定に覆いかぶさっている。見ているだけで押し潰されそうな迫力であった。

2度目の休みは、2,700mの高台に建つモンテ ローザ小屋下で、平坦に近い氷河上だった。スキーで丸く踏み固めたところでスキーを脱ぎ、ゆっくり昼食をとった。掴み所がないほど広がった氷河が急に喉のように狭まり、高さ3~4mの氷の迷路に入った。氷河の上を流れる水路で、所々に小さなムーラン、氷河上にできたマンホールのような竖穴があった。不規則に右折、左折を繰り返して進んだ。



差し込む陽光を不規則に反射させ明るく、異次元の世界であった。その直後、状況は一転した。陽光を遮る深いゴルジュ（峡谷）で、氷河の末端だった。ストックを放り投げ、スキーを履いたまま固定されたロープに掛りながら抜け出した。一段と温もりを増した陽光を浴びながらマッターホルン裾野の街、ツェルマットのスキー場まで一気に滑り込み、グレンツ氷河滑降を終えた。

今日の飛行はヘリ代の安いイタリア側からで、時間は12~13分、料金が1人16,000円、標高差2,700m、距離30kmの滑降が楽しめた。旅先での出費としては痛い。でも、アルコールを受付けない自分にとっては、飲兵衛の飲み代に比べれば、決して許されない贅沢ではないように思えた。午後、スイスからイタリアに行くため2本のロープウェーを乗り継ぎ3,886mの鷹マッターホルン、クラ

イネ マッターホルンに上がり、スキーコース内外の深雪を拾いながらチェルビニアに滑り降りた。標高差1,880m、距離20km。今日1日を合計すると標高差4,580m、滑走距離50kmになった。今日はイタリアからスイスに遊びに行き、午後イタリアに戻った。勿



エーデルワイスの押し花とブローチ（スイス）

論、パスポートなどの提示は一切なかった。

* 南欧 — ポルトガル共和国, スペイン, イタリア共和国, ギリシャ共和国, フランス共和国南部

フランスのリビエラ、コートダジュール、スペインのコスタ デル ソルなどは、地中海沿岸のリゾート地で、夏は北西ヨーロッパから太陽を求めて、冬は避寒地として観光客がやってくる。地中海沿岸は、夏に沙漠気候の支配下に入るので雨はほとんど降らない。冬は西岸海洋性気候が支配し降雨湿潤を特徴とする地中海性気候で、西岸海洋性気候と共に最適気候の1つとなっている。

地中海を低気圧が通過する時、サハラやアラビア半島から吹き出す強風が、地中海の水蒸気を吸い上げ、沿岸部に雨を降らせる。この風をシロッコと呼んでいる。他に、ロシア平原の冷気がアドリア海を越えイタリア半島を襲うのがボラ、アルプスからフランス南部に吹き降ろす寒風がミストラルで、ピレネー山脈に雪をもたらす。

ポルトガル（ポルトガル共和国）

＜ユーラシア大陸最西端 ロカ岬＞

ロカ岬はリスボンから列車とバスを乗り継ぎ 1：30。大きな十字架を載せた石碑が建つ岬に向って一本の通路が伸びていた。足元はササ、ツツジ科の低木や黄色い花をつけた植物が地を這い、風に耐えていた。その先 100mを越す断崖で大西洋が広がっていた。

石碑には、カモンイスの叙事詩の一節「陸尽き 海はじまる」が刻まれていた。ヴァスコ ダ ガマがアフリカの南端、喜望峰を越えてヨーロッパからインドへの航路を開拓しているが、それまでに多くの困難を乗り越えての結果であった。当時、船乗りたちの間で異常なまでに恐れられていたのがボジャドールという岬だった。カナリア諸島から南に 240 kmにある岬で、ここを越えて南に行った記録はなく、つまり当時の船乗りにとっての世界の果てとされていた。「この南は煮えたぎる海で湯気が出ている」、「信じられない急流で、海の底に引き込まれる」、果ては怪物たちの恐ろしい伝説に、亡くなった船乗りたちの亡霊の住処とされ、岬を遠くから見ただけで舵を切ったと伝えられている。

この根深い誤りに立ち向かったのがエンリケ王子だった。アフリカの地理情報と、自ら学んだ地理学や天文学を基に天文観測、航海術研究のために航海学校を設立した。1433 年、王子はシル エアネスに探検航海を託すが、ボジャドール岬の恐怖を払拭できず、失敗に終わる。翌年、不退転の決意で再度の航海で臨み、岬の南は決して特別な場所ではなく普通の世界、海が広がっていたことを報告することができた。

この航海は、恐れられていた岬を通過しただけで、実質的な成果は何もなかった。しかし、恐怖を克服し、船乗りたちの常識を覆す「大航海」であったとされている。そして、これを機にポルトガルの海洋覇権国家への道が大きく広がり、ガマのインド航路開拓へと繋がっていった。



バス停にあるツーリストインフォメーションで、ユーラシア大陸「最西端到達証明書」を申し込んだ。ヴァスコ ダ ガマを初めとするポルトガル黄金期の航海者を詠ったとされる、カモンイスの短い詩は証明書の裏に 9 ヶ国語で解りやすく解説されていた。

短い詩が証明書の色彩と古式ゆかしい文字とともに、500 年前の大航海時代におけるポルトガル人の進取の気骨を、容易に感じ取らせてくれた。

証明書『ポルトガル国シントラにあるロカ岬に到達されたことを証明します。ここは、ヨーロッパ大陸の最西端に位置し、「陸尽き 海はじまる」と詠われ、新世界を求め、未知の海へとカラベラ船を繰り出した航海者たちの信仰心と冒険魂が、今に尚、脈打つところです』

＜ポルトガルの市場＞

市場は空腹を満たし、元気をもらい、目の保養になり、その土地の理解に役立つ。これほど面白いところはない。ポルトの市場は庶民の台所に留まらず日用品から生花、お土産物屋まで多くの店舗が集まっていた。八百屋では、果物の種類の多さに驚いた。圧倒的に柑橘類とブドウ類が多いのは、地中海性気候の裏返しだろうか。どれも山のように積み上げられていた。ヘチマのようなキュウリ、巨人の握りこぶしのようなトマト、葉っぱの付いたニンジンなどなど、日本のものと比べるとみんな大きい。また、オリーブ漬けの種類の多さにも驚いた。味に違いがあるのかの質問への回答は味見だった。5種類を試食させてもらったが、感想は微妙に違う食感だけであった。

魚介類売り場は、国、地域が違ってなかなかの活気があった。イカ、タコ、イワシ、アジ、タイ、タチウオなど、日本でも馴染みの魚がピカピカに光って並んでいた。サケのような大きなものでも輪切りで、日本のように三枚下ろし、さらに切り身にしたものは見当たらない。魚売り場で最も幅を利かせているのがバカラオ、塩干シタラであった。ポルトガルにはバカリャウの〇×、バカ



バカラオ（塩干シタラ）



市場の中の果物屋

リャウの〇×など 365 種類のバカリャウ（干したら）料理があると言われるほどの国民食の食材である。バカリャウのコロッケとグラタンを食べたが、いつもどこかで食べているような、懐かしくすら感じられる味であった。肉売り場は、ソーセージが暖簾のようにさがり、種類の多さは日本の比ではなかった。太く短いもの、細くて長いもの、輪になっているもの、丸いものと様々であった。

これに味の違いを加味したら、とんでもない種類になるだろう。店頭に並ぶ生肉の主役は豚肉で、牛肉はわき役の位置を占めていた。目を引いたのは、笑ったような豚の顔と因幡の素兎が並んでいた。



ソーセージのカーテン



因幡の白兎

<ジェロニモス修道院>

ポルトガルを最初に海外進出に導いたのはエンリケ王子だった。1415 年、北アフリカ攻略を契機に、アジアへの新航路を志したという。1488 年、アフリカ大陸南端のケープタウン岬を発見し、「喜望峰」と名づけて大航海時代の幕明けとなった。王子の夢は、死後 38 年過ぎた 1498 年ヴァスコ ダ ガマによってヨーロッパとアジア、インドが海上航路で結ばれた。その結果、インドからの金銀、胡椒をはじめとする香辛料がもたらす富は、エンリケ王子の孫、マヌエルー世の時代に最盛期を迎えたという。



ジェロニモ修道院は、アジアへの新しい航路を目指した王子とガマによるインド航路開拓の偉業を称えると共に、新天地へと乗り出していく航海の安全を願って 1502 年に着工され、ほぼ 100

年の歳月をかけて建造された白亜の殿堂である。日本の歴史に置き換えると、戦国時代に入ったころに着工、そして100年後という徳川幕府の幕開けの頃である。建設資金は、ガマが持ち帰った香辛料売却による莫大な利益、その後の香辛料貿易による利益によって賄われたという。

一辺が300m、塔の高さ35m、55m四方の回廊には繊細な装飾彫刻が一面に施されている。クレーンのない時代に、目の前の巨大な石造建築物をどのようにして造り、大理石の柱、石灰石のアーチ一つ一つに掘り込んだ装飾に投入された労力を思うと気が遠くなる。大理石の彫刻に生涯を費やした石工はどれくらい居たのだろうか。また、完成を見ずに生涯を終えた職人はどれくらい居たのだろうか。

院内に入ると左手にヴァスコ・ダ・ガマとカモンイスの石棺が並んで安置されていた。カモンイスは16世紀の大航海時代に生きた詩人で、自らも航海に出て、世界を旅していた。1572年、叙事詩「ウズルジアダス」でヴァスコ・ダ・ガマのインド航路開拓を賞賛し、大航海時代で繁栄を極めたポルトガル黄金時代の航海者たちを謳っている。その一節が「陸尽き 海はじまる」で、極当たり前の、単純なフレーズだが、今日でも果てしない未知への冒険心、限りない夢、ロマンを掻き立てられる。

<本家本元のリアス式海岸>

スペインの北西端、ポルトガルの北、ビーゴのリアス式海岸を予てから訪ねてみたいと思っていた。深い入り江のリアが多数入り組んだ海岸線でリアス地方と呼ばれ、日本の「リアス式海岸」の語源となったところである。

ビーゴはイベリア半島の北西端で、ポルトガルの国境から直ぐの感じである。しかし、海岸に出ると、入り江が入り組んでおり、それを迂回するように道路が走っており結構時間がかかる。半島は日本の山地と異なり、なだらかな丘陵地でほとんどが畑地、棚栽培のブドウ畑であった。入り江はカキかムール貝だろうか養殖の筏と舟がたくさん浮かんでいた。これらの風景が薄らと霞んでおり、なんとも優しい印象だった。バスはビーゴを過ぎて、半島の高台で止まった。

ビーゴはリアス式海岸のビーゴ湾に沿った港湾都市で、スペイン最大の漁港だという。夏には、南の乾燥した地域から避暑地としてやってくるスペイン人がいるくらいで、外国人の姿は見られないという。日本人にとってのスペインは、マドリッド、バルセロナ、グラナダ、…の定番ルートで北西スペインは入っていない。これといった観光スポットもないので、地元の素朴なスペインの姿を見ることができる数少ない地方都市の1つだという。

<20世紀の奇跡>

遅い昼食後、聖母マリア出現の奇跡の地であるファティマに向かった。マリア出現は昔々の話ではない。20世紀になってからのことである。荒れた土地の貧しい村だったところに聖母出現によって聖地となり、巨大なバジリカ、大聖堂が建立され、多くの信者が国内全土から、世界各地から巡礼に訪れるところとなった。

ファティマの奇跡を少し調べてみると、1917/5/13、フランシスとジャシント兄妹、従姉妹のルシアの3人^(*)で羊の番をしているときに、突然、聖母マリアが現れたというのが話の始まりで

ある。そして、3人にだけ聞こえる声で、この地に礼拝堂を建てることを告げた。第一次世界大戦の終結後、子どもたちが間もなく死者の国へ旅立った。3人の子どもと法王だけが知る秘密の3つの予言をしたとされている。3つ目の内容は、教皇が襲撃されることがあるとの内容だったことが2000年に明らかにされた。1981年、ヨハネパウロ2世の暗殺未遂で、この予言通りだったということになり、奇跡を信じる人が増え、巡礼が一層盛んになったという。



聖母マリアのお告げで建立されたバジリカ中央の塔は65m、その左右に円形の列柱が並んでいた。この前には50万人が集まることのできる広場があった。広場のやや左寄りにバジリカに向かってコンクリートの細い通路のようなものが伸びていた。ここを冷雨の中、何かを祈りながらチベットで見た五体投地と同じように祈りながら進む姿があった。思えば日本にも百度参りがある。信じるものが違っても、見る者までもが息苦しくなるような苦行の意図するものは同じなのだろう。



バジリカの左手前に礼拝堂があった。3人の子どもたちの前に聖母が現れた場所だという。熱心にお祈りする人々の列ができており、キャンドルが赤々と灯り続けていた。雨上がりの広場を横断し、バジリカと反対の建物の前に、バジリカに向かって膝まずき、お祈りを捧げるヨハネパウロ2世の像に手を合わせてファティマを後にした。

(*) 『「ファティマの奇跡」最後の目撃者、死去』の新聞記事

第一次大戦中のポルトガルに聖母マリアが現れたと伝えられる「ファティマの奇跡」で、最後の「目撃者」とされるルシア デジェズ ドスタントスさんが13日、死去した。97歳だった。ポルトガル政府は15日を「追悼の日」に定め、総選挙を20日に控えた各政党も選挙運動を中止して女性の死を悼んだ

<コインブラ大学> — 世界遺産の大学

リスボンから北に200 km、コインブラへは2:30の快適なバスの旅だった。ポルトガルには、「リスボンは楽しみ、コインブラは学び、ポルトは働き、そしてブラガは祈りの街」と各都市を端的に紹介する言葉があると聞いた。コインブラはモンデゴ河畔に発達した教育、文化の中心地だ。1290年に設立されたコインブラ大学が、ポルトガルの文化の中心地に発展したという。

コインブラのバスターミナルから12、3分歩くとモンデゴ川に掛かるサンタクララ橋が見えてきた。リスボンに比べると人も車も少ない。気がつくともーリスティンフォメーションの前だった。ホテルを紹介してもらい、市内地図を買い求め、ファドの案内パンフをもらった。ホテルはポルタ

ジェン広場に面していた。階段、フロアーとも板張りの落ち着いた雰囲気、小太りのオーナーが気持ちよく迎えてくれた。

ポルタジェン広場及びここから市庁舎に伸びる通りには、カフェが並び、卵黄クリーム入り最中、オヴォシュ モーレシュはじめ多種多様なケーキやパンが並んでいた。かつて街を囲んでいた城壁の



入口の1つであったアーチ型の門、形も言葉の響きもアラブを感じさせるアル メディーナ門から旧市街地に入った。くねくねと曲がる坂や石段を登って行くと、子どもたちが遊んでいる背後に旧カテドラルがあった。そのまま人気のない石畳の坂道を登り続けていたら、石段が現れ、その先は三方が落ち着いた建物に囲まれた広い中庭だった。中央に建つ大学創設者、ジョアン三世の像を見てコインブラ大学の広場であることを知った。人々の出入りする正門に知の女神ミネルバの巨大

丘の上のコインブラ大学

なモザイク画があり、その前がディニス 1 世とミネルバ像で飾られた修理中の「鉄の門」であった。かつて鉄の扉があったところからの呼称のようだが、なにやら固い決意を秘めて通る感じを受ける。内部から振り返る「鉄の門」は、歴史的な大学の校門にしては狭く、堅苦しく、しかも建物の片隅にあり、砦の門の感もあった。左手前方、先ほど石段のところの人垣ができていた。しばらくして、世界に知られる図書館であることを知った。

図書館見学は、人数制限のガイド付だった。室内に入ると木製の大きく重そうな扉が直ぐに閉められた。湿度の関係かと思ったら、本に大敵である虫の侵入防止と虫対策としてコウモリを放し飼いしているためだという。夜になるとコウモリの落しものから机や椅子を保護するため、布を被せるとの説明があった。その後の後始末の説明はなかったが、イエメンで乾燥した糞上を歩いたサクサクという感触と音が蘇ってきた。

改めて図書館に集中すると、壁面は高い天井まで書籍棚になっていた。そして、柱から



撮影禁止の図書館内部（絵葉書）

手摺、書籍棚から書籍まで金泥細工が施され、黄金色一色の豪華な過ぎる空間に圧倒されてしまった。16世紀から18世紀の本を中心に、最も古い書籍は1000年以上も前のもので羊皮、手書き本などなど蔵書は30万冊だという。「ポルトガル最高級の文化財」、「世界で1、2位を争う豪華な図書館」の謳い文句は嘘ではなかった。館内の机は寄木細工が施された、木目が緻密で堅いマホガニー製だという。しかし、この煌びやかさの中では落ち着いて本を読めるのだろうかの疑問も沸いてきた。

＜コニンブリカの遺跡＞ーローマ帝国の都市

バスはターミナルの長距離レーンから発車した。モンテゴ川のサンタ クララ橋を渡って坂道を登った。あとは野を越え、幾つかの集落を過ぎ40分余りだった。紀元1～3世紀にかけて、ケルト人の集落の跡に築かれたローマ帝国の都市遺跡で、イベリア半島最大規模、保存状態が良く美しいモザイク模様が多く残っているのが特徴だという。

遺跡ゲートを通ると直ぐに石畳のローマ街道だった。この道もローマに通じていたのかと思うと、古代と現在の時間の隔たりやローマとコニンブリカの距離感が頭の中で消えて、想像と空想の自由空間で遊べた。道幅は4～5mで、これは馬車が交差できることが条件だったらいい。その先には、防壁が残っていた。壁高さは、石の大きさと数から推測すると6mあまりにも達する。ここを抜けると左手に石で囲まれた大小様々な住居址が広がり、富豪の邸宅跡の



前には色とりどりの小石で描かれた美しいモザイク模様が施されていた。そして、住宅の端に浴場があった。天井を支えていたと思われるアーチが奇麗に残っていた。また、歩き回っていると他にも浴場跡があり、ローマ人の風呂好きがうかがえる。気をつけて見ると、ここの浴場には、浴場の基本である冷水と温水にサウナの部屋まで備えていたと説明されていた。

日本人の風呂好きは世界的に知られているが、古代ローマにとっての入浴に興味を沸いてくる。

どうも彼等にとっての浴場は社会生活の重要な一部だったらしい。公の施設として造られ、料金は安く誰でもが利用できたという。当時のローマ人の生活は、午前中は仕事、昼食後は昼寝をし、その後は運動で汗を流していた。そして、運動場と対になっているのが浴場で、体を休め、飲食し、語り合いの悦楽に耽っていたことが知られている。浴場は単に入浴だけでなく、現代風の複合施設であったという。「何故毎日浴場に行くのか」と聞かれたローマ皇帝が「1日に2回行くだけの時間をとれないから



浴場の遺跡

だ」と答えたという。これは1回の入浴というか、浴場に居る時間が半日あるいはほぼ一日中と長いことをも意味しているという。皇帝は市民を喜ばせ、自らの名声を後世に残すために浴場を築いたとか、裕福なローマ人が浴場を貸しきり、一般に無料で開放したとの言い伝えが残っているという。

もう大分前になったが、トルコ東部とシリアで、中東で広く見られる伝統的な公衆浴場であるアラビア語でハンマーム、トルコ語ではハマームあるいはハмамを体験したことがある。これらは、イスラム世界がかつてのローマ帝国を支配した際にローマ人の浴場文化を引き継ぎ、発展させたものと考えられている。

ローマ街道を挟んで住居址の反対側に、遺跡のハイライトともいえるべき「噴水の館」があった。屋根で覆われ、ほぼ復元されて状態で保存されていた。噴水が復元され、水路には水が流れ、庭園には瑞々しい緑の草が生い茂っていた。通路のモザイクも美しい。その中に小動物の狩や魚を持っているのがあった。他に、公式行事や宗教行事などが行われたフォルムいわゆる広場や劇場、そして公会堂などなど、千数百年前の人々の暮らしと賑わいを想像してみると、浴場、美しいモザイク模様そして噴水つきの水の回廊などなどから美意識の高さ、精神的に豊かな暮らしが思い浮かんでくる。小規模ながら、遺跡に隣接して博物館があった。遺跡から出土したコイン、食器、ランプそしてモザイク模様などが展示されていた。

<ファド> — ポルトガルの民族歌謡

どこの国にもその国特有の音楽文化がある。アメリカのカントリー、ブラジルのサンバ、アルゼンチンとウルグアイのタンゴ、キューバのサルサ、モンゴルでは日本の演歌に似た歌などなどが思いつく。ポルトガルを代表するのがファドである。これを抜きにしてポルトガルは語れないとの文面にも触れた。いわばリスボンの下町で生まれた民族歌謡で、恋の切なさ、人生の哀歓、大海原から帰らぬ人を待つなどの歌、日本の民謡や、恋演歌、旅演歌のようなものと勝手に理解していた。

ファドの歴史は、いまだにはっきりしないといわれているが、「地球の歩き方」のファドを聴くによると、もともとポルトガルにあったとする説、イスラム起源やアフリカ伝来の説まで諸説があるという。有力な説の1つが、ブラジルで黒人奴隷が親しんでいた官能的な舞踊が、リスボンの下町に広まり、それに他の音楽の要素が加わり、次第に打楽器の要素が失われて、歌が強調されるようになったとされている。その後、19世紀中頃にリスボンのマリア セヴェーラの歌によって現在の地位を得たとされ、2011年には自分とポルトガルを象徴する都市、リスボンの歌として世界遺産に認定されたという。

リスボンのアルファマ地区にあるファドとポルトガルギター・ファド博物館に足を運んだ。ファドの起源や歴史を始め、ポルトガルギター、有名な歌手などの写真が展示されており、シオラマでファドの映像も見ることができた。でも、「ファド」という言葉



以外を知らなかったものには理解の域を超えていたが、人々が愛して止まない伝統歌謡に耳を傾け、雰囲気浸ってみたい気になった。

ファドの流れには二つあるという。リスボンの下町アルファマ地区の本家本元と、学術都市のコインブラの多感な大学生たちにより歌い継がれているうちに独特なファドが育まれたというコインブラファドである。コインブラに来て直ぐに訪れたツーリストインフォメーションセンターで手にしたパンフに従い、18時開演のファドの家に向かった。観客は20名程で、ブラジル、スペイン、国内からの観光客だった。会場は折りたたみ椅子が30脚位、正面に小さなステージがあり、12弦のポルトガルギター、別名ギターラとクラシックギターが置かれていた。わずかな照明とスクリーンがあるだけのはいたって簡素だった。コインブラ大学の象徴である黒マント姿2人の演奏者と歌い手が現れ、コインブラファドの由来を説明から始まった。余談だが、この黒マントはポルトガル語でカパ(capa)といい、日本の股旅にでてくる渡世人がまとっている「かっぱからげて三度笠」のかっぱの語源だと知った。

コインブラファドは、リスボンから持ち込まれたとか、500年以上の歴史を持つ大学の留学生が持ち込んだとかいろいろいわれているが、コインブラファドの継承者が、コインブラ大学の学生であり、卒業生であることから、大学とは切っても切れない縁があるようだ。また、ここの会場は、大学の卒業生によって運営され、出演者も学生と卒業生だという。歌手は1曲ごとにポルトガル語と英語で紹介していた。内容は学生たちが青春を謳歌し、思いを寄せる女性への胸の内を表す手段を歌に託して歌い、受け継いできたようだ。出演者は全員男性で、ポルトガルギターは現役学生、他は卒業生で、歌手は2名が交代で歌ってくれた。数曲歌って、最後は「リスボンの春」をみんなで合唱して終わった。

ファドの感想は、確かに悲しみや淋しさの歌ではあったが、思っていたほどの暗さはなく、演歌のねっとりとしたものではなかった。むしろ、愛と恋への憧れのようなものを感じた。ポルトガル語を全く理解しない者の感想だが、歌詞を理解できれば別の魅力を感じ取れたのかもしれない。所要時間は1時間だった。その後、景気よくワインの栓が抜かれ、希望者に振舞われた。

<ポルト>

○ サン ベント駅の装飾タイル

コインブラに3泊した後、バスでポルトに移動した。所要時間1:30。ツーリストインフォメーションで紹介してもらったホテルは3星で、市庁舎の直ぐ前、ジョアン1世広場に面していた。市庁舎近くのツーリストインフォメーションで市内地図をもらい、ホテルの位置確認を兼ねて、街の中心部にあるサン ベント駅に向かった。駅前のツーリストインフォメーションであれこれ言葉を交わしていると、サン ベント駅が美しいから是非見に行くようにと薦められた。その様子は



何とも誇らしげだった。駅舎は 20 世紀初頭の石造りで、壁面のアズレージョ、装飾タイルは、ジョアン 1 世のポルト入城やセウタ攻略などポルトの歴史をモチーフにしたタイル 2 万枚の絵巻物であった。鉄道利用者以外の多くの人が眺めていた。絵の下に題名と簡単な説明文が添えられており、駅舎というよりまるで美術館だった。

以前、シベリア鉄道で訪れたモスクワで、スターリン政権下で「社会主義のショーウインドゥ」、「労働者の宮殿」をめざし、国家事業として進められた地下鉄の駅は美術館と見間違えるほどの美しさに驚いた。また、タイでスコタイからバンコックに戻るとき、空港の感想を聞かれたことがあった。30 分そこそこのフライトにしては運賃が高すぎるのでは…と疑問をぶっつけたら、その分、空港は花々で飾られて美しいし、果物もフリーだ、と自信に溢れた回答を思い出す。いづれにしても、他人に薦められる公の施設を持っている人々は幸せだ。

余談だが、18 世紀から 19 世紀にかけて、ポルト港から特産のワインがポルトワイン、英語ではポートワインとして盛んに輸出されていた。ポートワインは、ポルトガル産ワインを意味していた。ところが、日本の酒造メーカーから売り出された O×ポートワインの商標が、ポルトガル政府からの抗議で O×スイートワインに変更する出来事などもあった都市である。

○ サン フランシスコ教会

ドウロ川河口の丘陵地に広がるポルトは、航海時代のリーダーとして、ポルトガルの発展に大きく貢献した英雄エンリケ王子生誕の地である。リスボン郊外、ベレン地区にあった発見のモニュメントの先頭はエンリケ王子だった。そして、ポルトこそが大航海時代の幕開けを告げた街であった。

サン フランシスコ教会は 14 世紀建立の修道院付属の教会で、飾り気のない外観とは裏腹に、内部はくらくらするほどの黄金色一色の派手な空間だった。祭壇のみならず天井、柱、壁も繊細で、深い彫刻で埋め尽くされ、その上に金泥細工、ラーリャ ドゥラダが施されているのだという。使用された金は 400 kg とも 600 kg ともいわれ、想像もつかない量である。これらはブラジルを初めとする植民地で産出したものだという。当時のブラジルは黒人奴隷を労働力にした「砂糖の時代」から、17 世紀末から 18 世紀末まで続く「金の時代」、すなわちブラジル版ゴールドラッシュで賑わっていた。世界の金総生産量の 85% を占め、リオデジャネイロは金の出港として大いに賑わった時代である。かつて中南米を旅したとき、殆どのカテドラル、教会の祭壇を飾る金は剥ぎ取られ輝きを失っていた。そんな中でパナマのサン ホセ教会だけは、黄金の祭壇を漆喰で覆って隠していたので略奪から逃れ、重みのある輝きを放っていたのを思い出す。夢と希望に満ち、不屈の精神の大航海も、その裏面には生々しい人間の欲望丸出しを想起させる教会でもあった。



キリストの家系図 ジュッセの樹

自分は仏教徒であるが、手元に 3 冊の聖書がある。旅に出る時、是非手元に…と知人からいただいた新約聖書、エクアドルを旅しているとき、現地のバスツアーのドライバーから日本人へと手渡されたスペイン語のもの、友人の発表会で地元の教会を訪ねたときにいただいたものである。申し

訳ないが、最後まで目を通したものは1冊もない。新約聖書の冒頭に出てくるアブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図、この後も延々と続く人の名前でギブアップである。このような不信心ものにもかかわらず、ここサンフランシスコ教会にあったキリストの家系図「ジュッセルの樹」が目にとまった。ダビデ王の父エッサイからイエス・キリストにいたる系図を1本の樹に表したものである。一番下にエッサイが横たわり、そこからユダ王国の12人の王が枝になっていた。一番上が聖母マリアと幼いキリストであった。この立体像を拝むためにわざわざ足を運ぶ信者がいるという。

他に16世紀、豊臣秀吉の命によって処刑された長崎の殉教者26聖人のうち8人、フランシスコ会所属の殉教者を祀っている図があった。ぼんやりと眺めただけで、特に意識することもなかったが、何年か前に長崎で見た26聖人等身大のブロンズ像が頭に浮かんだのは外に出からだった。

エンリケ王子の家を經由して、急な坂道を通して民家の間をすり抜けてドウロ川川辺、カイスダリベイラに下りてきた。川面を前にして大きく深呼吸した。この開放感は何だろう。周りは洒落たレストランにカフェ、華やかなお土産物の露店が並んでいて賑やかなところだ。自分には理解の域を超えている宗教関係の建物、一般庶民とはかけ離れた贅を尽くした建築物に心身ともに混乱しきっていた。ゆったりとした椅子に身を沈め、行き交う観光客と川面の船を眺めて休憩を取った。

○ 橋

レストラン前の船着場からドウロ川クルーズに出た。川面から見上げるとポルトの街は、川沿いの崖に近い斜面に民家が積み木のように張り付き重なり合っている。この急坂が水中まで続き、水深を深くし、大型船の水路と港造りに役立ったのだろう。日本の港町、長崎も横浜もポルト同様坂の街だ。観光船は上流に向かって進みだすと直ぐに、深く切れ落ちたドウロ川を跨ぐ大きく、美しいアーチ型の橋、上部は人とメトロ、下は人と車が通る二層構造のドン・ルイス1世橋を潜った。丘の街ポルトが上下に大きく広がっていることからの構造らしい。程なく城壁のようなものが見え、白い自動車道のインファンテ橋、鉄道専用だったドナ・マリア・ピア橋を過ぎ、新しい鉄道専用サンジョアン橋でUターンした。この後、船は兩岸の建築物を眺めながら河口近くの橋まで下り引き返した。先年、パナマ運河クルージングの時は、太平洋、正確にはパナマ湾に出たからクルージングが始まったのを思い出し、かつての航海者たちも見たであろう大西洋からポルトを眺められるのでの期待していたのだが……。海洋国家ポルトガルにしてはサービスに欠けるのではと思えた。

クルージングの後、観光客で賑わうカイスダリベイラを通り抜け、ケーブルカーでドン・ルイス1世橋上部へと向かった。長さは400m、川面からの高さは100mだという。メトロ用線路の両脇は歩道で、線路横断は自由だった。1歩進むごとに右岸には旧市街地の教会や宮殿の眺めが、左岸のポートワイン工場が開けてきた。市街地から眺めても、川辺から見上げて鉄筋の美しい橋は、橋上からの眺めも1級品だった。この洗練



された美しい橋の設計者は、エッフェル塔を設計したエッフェルの弟子によるものだという。橋も

道も単に人や物の移動を果たすだけでなく、土地の人々の憩いの場として溶け込み、シンボルやランドマークとしての役割を担ってこそ、豊かな人間性の開花に役立っているように思えた。

<シントラ> — 宮殿と王宮の街

シントラは、リスボンの北西 30 km 弱に位置し、ポルトガルの王家に愛された避暑地であった。鉄道でロシオ駅始発、シントラ駅終点と便利で、所要時間 40 分である。車中の途中から雨が降りだした。ロカ岬は晴天の日にすることにして、終日シントラ散策を決め込んだ。

ペーナ宮殿のチケット売り場から宮殿までバスが運行していた。雨の中で列をつくり待っている



と、何ともレトロな緑色のバスがきた。華々しい大航海時代が過ぎ去り、ポルトガル王家の輝きが薄れた 19 世紀、女王マリア 2 世がドイツの王族フェルナンド 2 世と結婚し、ペーナ宮殿の建設が始まった。標高 529m の山頂に出来上がった夏の離宮である。手元の資料によると、「建築様式の寄せ集め」、「趣味の悪い色使い」など、あまり芳しくないものが目立つ。建築様式の詳しいことは解らないが、中世のヨーロッパの城とイスラム教のモスクに似たタマネギ型のドームが共存していた。雨に煙る森の中に、外壁の黄、青、赤茶は、一見テーマパークの城にも見えた。外観は造り、色彩とも賑やかだったが、展示されている家具や、芸術、骨董品は落ち着いた色彩のものが多かった。そして、宮殿のあちこちに狭い階段や細い通りがあり、テラスへと通じており、実用一辺倒でない遊び心が感じ取れた。思えば、日本の家屋に見られるガラス窓と障子、

畳とカーペット、ベッドと布団と、和洋を巧に取り入れ、双方の良さを利用していることに似ている様にも思えてきた。

ペーナ宮殿からシントラ ヴィラのバス停まで 10 分ほどだった。小さい街ながら表通りには、ケーキ屋、レストラン、雑貨屋などが並び、一寸小路に入ると坂道となる。小綺麗な家屋に混じって、傾斜を巧に利用した小さな店、レストラン、カフェが点在していた。街全体が綺麗で、一体感があり、天気の良い日に歩き回りたい街だった。

シントラは、14 世紀、エンリケ王子の父ジョアン 1 世が築いた宮殿を中心に広がった。16 世紀に入るとポルトガルは全盛期を迎え、マヌエル 1 世によって豪華な室内に改築され、ポルトガルの栄華を今に残す王宮になったとい



う。そして、マヌエル 1 世はこの宮殿でヴァスコ ダ ガマのインド航路開拓などいくつかの重大決定をおこなったとされている。

王宮の外観は、円錐状の大きな 2 本の煙突が目をつけたが、意外なほど質素だった。内部に入ると、色鮮やかな装飾タイルのアズレージョの壁、木製の調度品、黄金のシャンデリアと地球儀などなど、当時の世界をリードしていた国の王宮であることを実感した。天井に白鳥の描かれた「白鳥の間」、1 羽 1 羽のポーズが違うが、どの白鳥も王冠をつけていた。続いて天井にカササギで飾られた「カササギの間」。尾羽の向きが揃えられており、全体的に見ると幾何学文様にもみえる。「ガレー船の間」、ガレーとは、ギリシャ ローマ時代から中世にかけて地中海を中心に活躍した戦用船である。大航海時代の覇権国家を象徴しているのだろうか。圧巻は、四方の壁を狩猟の様子を描いたアズレージョ、装飾タイルで飾られた広い「紋章の間」だった。ドーム状の天井には各地の紋章が描かれ、大きさと共に黄金色の煌びやかな文様は迫力があり、ポルトガルの歴史を感じられた。

王宮のテラスから見るシントラの景色は、緑深い山肌に白と茶褐色の建物が点在していた。この調和こそがシントラの美しさに思えた。時間を気にすることなく、人の流れに添っての見学だったが、気がつくとも 1 時間を優に越えていた。

<リスボンで日本を考える>

今日のポルトガルは、ヨーロッパの片隅、スペインの陰でひっそりとしている。かつての覇権国家の面影はない。その原因の一つが 250 年ほど前の大地震との説がある。10 年前、日も未曾有の大震災に見舞われた。更に南海トラフ地震や富士山噴火などへの警戒が呼びかけられている。1755 年、リスボンはマグニチュード 8.5~9.0 の大地震に見舞われた。その直後の津波と火災で死者が 3 万~4 万人及んだ。大航海時代の拠点となって栄華を誇ってきたリスボンは、一瞬にして瓦礫の山と化した。このヨーロッパ最大の震災に対して、国王ドン ジョゼ 1 世からその対応を一任されたのがセバスティアン デ カルヴァーリョ、後のボンバル侯爵であった。

大震災直後、「神の怒り」として悔い改めるように説く聖職者に対して、彼は「地震は自然現象」と断言し、被災地の惨状をいち早く把握し、消防隊を組織、食料と飲料水の供給、軍隊による治安維持、仮設住宅の建設、物価の統制などなどの対応策を矢継ぎ早に実施した。そして、数千の遺体埋葬が間に合わないともみや、当時の風習に反し、教会の反対を押し切ってテージョ川から沖に流して水葬に付して疫病の広がりを抑えた。また、諸外国からの援助と一般市民の労力を利用し瓦礫を撤去し、王の力を借りて建築家を雇い、大きな広場と直線状の広い街路を目指した都市計画を半ば強引に推し進めた。その結果、1 年以内にリスボンから廃墟が消え、至る所で耐震建築の新しい街造りの槌音が響くようになったという。

リスボンは、大震災の後全く新しい都市として再生した。しかし、植民地に依存した国家経済はブラジルを失い衰退への道たどる。日本の教科書に「大英帝国の興亡」は載っているが、同じ海洋国家であるポルトガル衰退項目の記憶がない。地震となると否応なしに 2011 年の東日本大震災が脳



ボンバル侯爵像

裏を過る。その後の復興は、安全神話の崩れた原発事故が重なり、1995 年の阪神淡路大震災に比べても遅々として進まない。挙句の果ては復興予算が、被災地以外の道路整備や官庁施設や公営住宅の耐震化、武器車両等整備費、航空機整備に使われているとの報告まであった。

今年の3月で大震災から 10 年の節目を迎える。原発事故は、前総理の世界に向かって発した「アンダーコントロール」とは裏腹に、廃炉作業はコントロール不能に陥っている。これに加えて、昨年



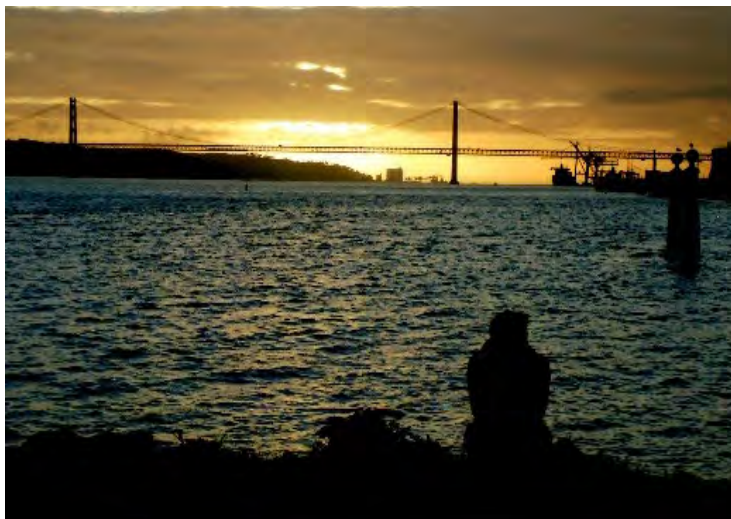
からの新型コロナウイルス感染拡大である。この未曾有の国難に対する政府の右往左往ぶりを見ると、信じて疑わなかった「先進国日本」は夢幻に思えてくる。虚言癖でその場しのぎの自分の言葉で国民に訴えられない国のリーダーではなく、日本版ポンバル侯爵は現れないのだろうか。今の日本は「英雄がいない国は不幸だ!」、同時に「英雄を必要とする国が不幸なんだ」（ブレヒト「ガリレイの生涯」）の状態である。

震災後造られたリベルダーデ通り ポンを代表する繁華街で長さ 1.5 km、幅 90m の公園。歩道には職人の手作業で白と黒の大理石で模様が描かれている

＜ポルトガルの締めくくり＞

日本人が初めて会したヨーロッパ人は、ポルトガル人であった。日本史で覚えた「充分にご予算あります」の 1543 年である。その後、およそ 100 年間交易が続き、多くの物品が日本に入ってきた。それは今日に残るパン、カップ、シャボン、カルタ、カステラなどの言葉からも知ることができる。

ポルトガルのエンリケ王子の後押しを受けたヴァスコ ダ ガマが、1498 年、ヨーロッパ人として初めて海路でインドに達した。この航海はポルトガル 1 カ国に繁栄をもたらしただけではない。未知の国同士を結びつけ、新たな世界観を生み出した。ヨーロッパ人が世界と向き合った大航海時代、リスボンはその拠点の 1 つで、世界で最も繁栄し、輝いていた。リスボンはテージョ川に面した港町である。この川にヨーロッパで最も長い全長 17.2 km の吊り橋が、1998 年に完成した。大航海時代を代表する航海者、ヴァスコ ダ ガマのインド到達 500 周年を記念してヴァスコ ダ ガマ橋と命名し、彼の功績を今でも称えている。



また、ポルトガルは物価の安い国としても知られている。大体、物価の安いところは面白いところが多い。これまで旅先に選んだインド、スリランカ、エチオピア、モンゴル、ボリビア、パラグアイ、パナマなどなど、どこも物価が安く、思い出に残る国々となっている。ポルトガルは、物価が決して高くはなかったが、これはあくまでもヨーロッパの中での話であった。同じラテン民族の国であるスペインやイタリアのような派手さ、陽気さはなく、長く堅実な歴史に支えられた大らかで謙虚な国民性が伺われた。街の至るところに史跡、遺跡があり、目立つ建物があつた。

これまでさほど意識することはなかったが、ユーラシア大陸の西端がポルトガルの口元岬だ。極東の島国、日本に住むものにとって憧れみたいなものを感じる。あらためて、ポルトガルの魅力は？と考えてみると、街の美しさ、建物に見る歴史の重み、人々の優しさ、料理の美味さ、そしてのんびりとした人を安心させる雰囲気などなどが思い浮かんでくる。

ポルトガルは2014年、『コンデナスト トラベラー (Condé Nast Traveler)』誌のスペイン語版の選ぶ最高の旅行先に選ばれたほか、旅行ガイドブック『ラフガイド (Rough Guides)』では最もお得な旅行先として選ばれたことを宿の情報誌で知った。それによると、ポルトガルの数ある魅力の中でも代表的なのは、文化、料理、ワイン、ビーチ、歴史、多様な景観だが、とりわけ特筆すべきは、愛想がよく、寛大で、正直だと隣国スペイン人に評価されるポルトガル人のもてなしの心だとあつた。実際、旅を通して感じたことは、酸いも甘いも噛み分けた、いい感じに肩の力が抜けた魅力的な大人の国であつた。

リスボンに4泊して、コインブラにバスで移動して3泊。ポルトにバスで移動して4泊後、列車でリスボンに戻って4泊の旅だった。日程的にはかなり余裕をもったが、行きたいところを全部廻れた訳ではない。再訪への期待もあるが、次回はどこそこと決めるよりも、「歩く 見る 聞く」という旅の基本の感覚が錆びつかないように旅を続けたいものである。

* 東欧

今日では死語の「鉄のカーテン」

「バルト海のシュチェチンからアドリア海のトリエステまで、ヨーロッパ大陸を横断して『鉄のカーテン』が降ろされた。この線の向こう側はもうソ連圏であり、そこに住む人々は、なんらかの形でソ連の影響力のもとに従属しており、モスクワからの強力な支配のもとに置かれている」(1946年、イギリス元首相チャーチルの演説の一節)。「鉄のカーテン」は、文字通りヨーロッパを北から南へ縦断する1,700 kmの国境線である。その東側に第2次世界大戦後、ソ連の影響下で誕生した新しい東欧世界があつた。人口1億4,000万人を擁する社会主義国家群として1990年までのおよそ半世紀の間、ヨーロッパの一角に存在していた。

しかし、ヨーロッパの長い歴史から見ると、東欧は政治的にも経済、文化面からも、ソ連(現ロシア)よりも西欧との関係の方が密であつた。ヨーロッパには北欧と南欧という名称がある。これは地理的な位置とともに文化的民族的にも共通性を持っている。しかし、「東欧」、東ヨーロッパや「西欧」、西ヨーロッパは、それとは少し意味が違う。東欧は西欧と対比されて初めて成り立つ。東欧という地域的なまとまりを持つようになったのは第2次世界大戦後である。ソ連の強い影響かで社会主義政党が政治の実権を握り、社会主義建設を進めた当時の旧東ドイツ、旧ユーゴスラビア、旧チ

ェコスロバキア、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、ルーマニア、アルバニアの 8 カ国であった。

東欧革命

東欧の国々はソ連型社会主義をモデルにした。政治的には共産党による「一党独裁」で、農業は集団化が推し進められ、中央集権的な計画経済体制に移行した。ソ連を手本に「5 カ年計画」などで重工業優先の工業化政策が進められ、国民生活にかかわりの深い農業や軽工業が後回しになり、生活水準はなかなか向上しなかった。

しかし、農村地域の過剰な労働力を工業に割りふり、工業原料やエネルギー資源の大部分をソ連に依存するなどで経済成長が見られたが、1960 年代末以降、経済のつまずき、ソ連の国力低下に伴い影響力も低下した。さらには独裁政治への反発、思想、信条、表現など基本的人権の抑圧に対し、民衆の激しい抵抗が起こった。

1989 年、社会主義体制から市場経済の導入、複数政党制による議会制度の導入などの民主化を目指す変革、「東欧革命」が一斉に起こった。「ポーランド 10 年、ハンガリー 10 ヶ月、東ドイツ 10 週間、チェコスロバキア 10 日間、ルーマニア 10 時間」といわれるように共産党政権が加速度的に倒れていった。

環境問題

東欧の一党独裁時代、劣悪な条件下での工業が大きな環境問題を引き起こしていたことが報じられている。ポーランド南部、古都クラクフにある歴史遺産ヴァヴェル城の石像の顔が酸性雨で溶け、ホヘミアの森の立ち枯れなどである。

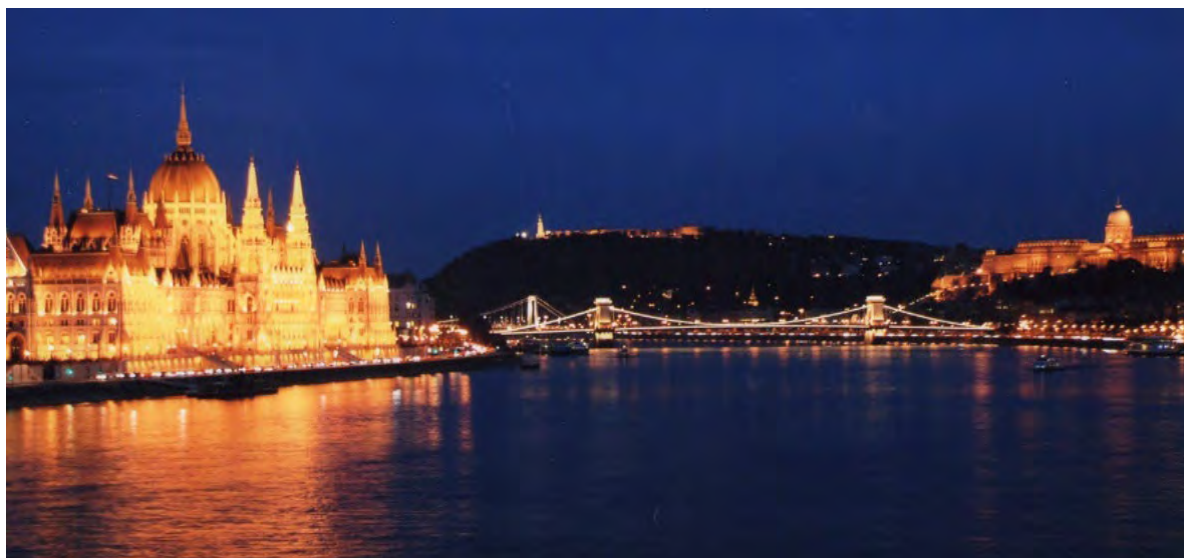
もともと公害や環境破壊は、資本主義経済特有の問題とされてきた。企業が公害防止に投資しても直接利潤を生み出さないので、可能な限り公害防止への投資を節約する。一方、社会主義国では産業活動は国家計画に基づき行われ、利潤目的でないから公害や環境破壊は起こりにくいとされてきた。ところが、東欧の国々で先進工業国にも増して深刻な公害や環境破壊が進んでいた。

その要因はエネルギーの主役が、硫黄酸化物や窒素酸化物などを多く排出する石炭で、その対策が進まず、環境保全や汚染防止を重視されなかった。また、先進国に見られる環境破壊や汚染をチェックする機能がなく、住民生活を守る運動や世論の力も存在しなかったことなどがあげられる。

ハンガリー（ハンガリー共和国）

ハンガリーは東西南北 7 カ国に囲まれた内陸国である。東ヨーロッパは日本に取ってあまり馴染みのない地域だが、親日的な国として知られている。その理由の 1 つが、ハンガリー人の起源がアジア系であることからきているらしい。ハンガリー人は自らをマジャール人といい、全人口の 98% を占めるモンゴル系の人々である。彼らの祖先は、ウラル山脈の南部からボルガ中流域のステップ地帯で活躍していた遊牧民であるといわれている。とはいっても、容貌にアジア系の名残は少なく、ヨーロッパ系民族と区別がつかない。彼らの言語は、ヨーロッパではかなり少数のアジア系フィン

語グループで、インド ヨーロッパ語を話す民族に囲まれている。そのうえ、モンゴロイド起源を表す蒙古斑を残す子どもが今でも見られるという。周囲の人種と異なる少数の人種ということで「人種島^(*)」と呼ばれている。



ドナウの真珠、ドナウの薔薇 と例えられるブダペストの夜景

(*) 人種島 ヨーロッパではハンガリーとフィンランド人が知られている。きっちりと分類することは不可能なほど世界中で混血やボーダレスが進んでいるの現状である

<プスタ>

ハンガリーの国土の大部分は、広大な平野と穏やかな丘陵からなり、山地は北部のスロバキア国境付近にわずかに見られるに過ぎない。ドナウ川の東には、ヨーロッパの内陸国とは思えないような雄大な景観が広がっていた。見渡す限りの草地と畑地で、地平線の彼方まで続いている。最もハンガリーらしい景観とされ、この広大な草原は「プスタ」と呼ばれ、戦後になって灌漑施設が整備され、農耕や園芸が盛んになった。ハンガリー行第一の目的がプスタであった。

プスタの中に「ホルトバージ国立公園」がある。遊牧民の生活を今日でも垣間見ることができる。園内には、肉は普通の牛肉より高級で、ミルクはモツレアチーズになるという水牛。60 cmもある長く立派な角をもつ灰色牛で、ハンガリーの固有種の「スルケ マハラ」。全身が巻き毛でもこもこした愛嬌のある「ウーリーピッグ」、これもハンガリー原産の「マンガリッツァ豚」で、何と「国宝」に認定されている。振れた細長い 30 cm 弱の角に黄色目をした羊「ラッカ」で、こちらもハンガリー固有種だという。

プスタ伝統のタニャ、草ぶき屋根の大きな建物住宅兼家畜小屋入口の薄汚れたモップが突然動き出した。イヌだ。もじゃもじゃした毛で通称モップ犬だが、牧羊犬として活躍している「プリ」で、これもハンガリー固有種だという。

馬があつてのハンガリーだから広大な平原には騎乗姿が良く似合う。ここホルトバージ国立公園で飼育されている馬は、彼らの故郷である西域、中央アジアに産したという天馬、汗血馬の血をひく馬かと思ったら、ナポレオン戦争の際フランス軍が連れてきた軍馬の血を引いており、今日ではハンガリーの宝になっているという。



＜国宝マンガリツァ豚＞

200 年ほど前、ハンガリーで誕生した特殊な豚で、第二次世界大戦までは、数百万頭単位で放し飼いかそれに近い状態で飼育されていた。体の 70% 近くが脂肪で、世界で最も脂肪率の高い種だという。20 世紀に入り、脂よりも赤身の肉が重宝されるようになると、肉が多く取れ、大量飼育可能な豚種が急激に普及した。それに反比例してマンガリツァ種が急激に減少し、1991 年にはたった 198 頭と、絶滅寸前の状態に陥ってしまう。その後、保護され、飼育制度が定められ、50,000 頭まで回復し、希少性から 2004 年、国宝に指定されたという



「国宝なのに食べても良いのか」の疑問が出てくるが、誰も食べなくなったから絶滅の危機に瀕し、食べる人がいるから飼育が盛んになったことを思うと、今後も食べ続けていきたい国宝なのだという。現在は肉質が良く、脂の融点が低く、霜降り率が高く、しかも脂肪たっぷりながらコレステロールが極端に少ないということで国内の高級レストランをはじめ世界数カ国に輸出されているという。今は 1 頭ごとにマイクロチップで管理、飼育されているという。

＜マジャール人の馬術＞

牧童が振り回す鞭の音がバッシ、バッシと響いた。馬が長い足を畳み込んで大地に腰を下ろした。次の鞭で 4 つ足を投げ出した格好で横になってしまった。牧童が馬の脇腹に乗っても動かない。馬は立ったまま眠り、横になるのは重い病の時だと聞いたことがある。馬にとって日常あり得ない格好をこともなげにしている。馬が利口なのか、牧童の妙技なのかと思ってしまった。

前三頭、後ろ二頭の五頭の馬が走り出した。後ろの馬の背に片足ずつで乗って馬を操っている。ゆっくりと走りだしたが最後は全速力だった。馬の背中に



立つ靴を見せてもらった。厚さ2cm程のスポンジが張られていた。遊牧騎馬民族を祖先とするマジャール人の魂を見た思いだった。

＜ハンガリー料理＞

「グヤーシュ スープ」はグヤーシュ、牛飼いたちが大平原で料理して食べていたものだという。グヤーシュの赤い色はパプリカによるものだ。イタリア料理の「赤」はトマト、ロシアは赤カブ、ビートである。

グヤーシュはハンガリーを代表する食べもので、どこでも食べられる。一般家庭でも学食でもレストランでもつくる。地方や家庭によって味や材料が異なるが、絶対に譲れないことは、肉はビーフ、そしてパプリカで調味することだという。パプリカとは、スパイスパプリカ、つまり香辛料のこと。どこのスーパーでも様々な種類のパプリカが売られている。甘口、辛口とあり、辛さのレベルも家庭や店によって違う。しかし、甘口パプリカであっても、量はどっさり入れる。ハンガリーであらゆる料理に活躍するパプリカは、元々はアメリカ大陸、中米が原産で、16世紀初めにコロンブスがスペインに持ち帰ったものだという。今では、全国的に栽培され、重要な輸出品となっている。



店頭を飾るパプリカ

＜イヌ文化＞

人間がオオカミを何処で人懐こいイヌに進化させてきたのか解らないままだったが、最近の研究の結果、ヨーロッパの狩猟採集民族によって始まったとされている。この度の東欧の旅で、イヌが人間と同じように扱われている光景に日常的に出会った。

イヌの料金を払えば合法的にメトロやトラムに乗車できる。乗車中は伏せの状態と動かない。レストランもイヌと一緒に当たり前で、イヌの存在に気づかないこともしばしばだった。スーパーマーケットでは飼い主が出てくるまで、「待て」の姿勢のままである。散歩中のイヌがお互い無視に近い状態ですれ違う、救急車のサイレンの音にも反応しない。日本との最も大きな違いは、イヌが大人しいことだ。躰というか訓練のイヌ文化の違いに驚かされた。

訓練されたイヌの代名詞でもある盲導犬は、帰宅してハーネスを外した途端本来のイヌの姿、人間に例えれば手足を伸ばしてくつろぐというが、街で見かけたイヌたちが家に帰った後の振る舞いが気になった。

公園などイヌの集まる所に、イヌ専用のごみ箱、ビニール袋の入ったものが設置されていた。自転車で点検、補充している若者の姿を見かけた。社会全体の心配りが基盤にあってのイヌの社会的地位であることを知った。

ところで、日本でペットショップや量販店のペット売り場に行くと、小さなケージというかショーケースに入れられた子イヌや子ネコを見かける。いつも売れ残ったのはどうなるのかな…と思いながら通り過ぎてきた。しかしこの光景は、世界的に見ると日本特有のものらしい。ドイツの例だが、ペットショップの飼育環境が、法律でケージの大きさ、採光、温度、排水、売る時間や売って良

い年齢まで細かく決められている。生後間もない幼少期の子イヌ、子ネコを母親や兄弟から引き離すのは、生活パターンが狂い、障害が残る可能性があるという。それでブリーダーにも、繁殖は年に1回、ある一定の年齢以上は繁殖禁止、少なくとも3ヶ月間は親や兄弟と社会性を身につけてから飼い主に渡されるなど細かい条件が付けられている。

パソコンに1,000人当たり飼われているイヌの数で表した「イヌ好きな国ランキング」があった。トップがチェコで299.6匹、2位がアメリカで212.0匹、3位ハンガリーの204.8匹で、東欧のイヌ好きが表れている。

<アッグテレク>

ヨーロッパ最大のカルスト台地に大小さまざまな鍾乳洞が712個密集し、全長は25km、一部は国境を越えてスロバキアに達しているという、世界遺産「アッグテレク カルストとスロバキア カルストの洞窟群」に出かけた。

鍾乳洞の中間に天井が高く、広いドーム状の空間があり、プラスチックの椅子が50～60脚並んでいた。暗闇の中に音楽が流れだし、リズムに合わせてライトが点滅し始めた。幻想的に浮かび上がる巨大な鍾乳石の間を、抜群の音響効果で



響き渡る綺麗な音色にしばし耳を傾けた。ハンガリーの鍾乳洞は、天然の音楽ホールでもあり、時々コンサートも開かれるという。耳と目で楽しむ空間にしてしまうとさすが芸術の国である。

洞内の一部に直径50～60cmの赤色の鍾乳石が林立する箇所があった。生乾きの血糊という感じで何とも不気味だった。あの赤色はどんな化学反応の結果できたのだろうか。

人間の作る彫刻と違い、鍾乳石の成長は100年で1cmにもならない。数百万年もの間、全く変わらない洞窟がここにあり、水の滴りで造り上げたものだ。自然界と人間の時間の流れが桁違いに異なるにもかかわらず、幸運な巡り合わせで自然の芸術を目にできる幸せを感じた。

<芸術の都 ブダペスト>

「芸術の都ウィーン」、「音楽の都ウィーン」はよく耳にする。以前、オーストリアはハンガリーを併合し、「オーストリア ハンガリー帝国」の時代があった。ハプスブルク帝国の中核として栄えブダペストは、ウィーン、プラハと共に芸術や建築、食文化など様々な文化が花開いたことで知られている。ブダペストには223の博物館や美術館があり、40以上の劇場、7つのコンサートホール、オペラハウスがあるという。なかでも19世紀に建てられたオペラハウスは、あまりの豪華さにハプスブルグ家も嫉妬したといわれている。

ヴルシュマルティ広場とヴァーツィ通りを中心にして大きな環状通り、メトロ1路線のオクトゴ

ンの近くにある「リスト フェレンツ国立音楽院」、通称「リスト音楽院」には、世界中から留学生が集まるという。ここはリスト自身が設立した世界で唯一の音楽院だという。ピアノの天才として、作曲家、指揮者、慈善家などいろいろな顔をもつリストが、「芸術家は自分の才能を人類のため、そして真の才能をもつ人の育成のために使う義務がある」を信条に実現したもので、次世代の音楽家たちが集うところとなっている。

<芸術留学>

ブダペストで投宿していたツーリストハウスに1日1時間のピアノ、あるいはフルート、バイオリン、ダンスなどのレッスンを受けるため、高校、大学を終えた日本の若者たちが長期間滞在し、明日を夢見て頑張っていた。想像するに短くとも数ヶ月の滞在だろうから、かなり裕福な家庭の子どもたちだ。慣れない自炊の一人暮らしで、かなり苦勞している面も窺えた。眠れないということとで3時、4時過ぎまで起きている。午後に起きて夕方からのレッスンに向かう。ストレスと片寄った食事からだろうか貧血や便秘の辛さを語る子もいた。2度3度料理する様子見る機会があったが、一般家庭の日常生活の食事とは程遠いものだった。そして、何よりも大切な生活リズムである、朝に目覚めて、タベに床に入るから余りにもかけ離れているのが気になった。

ルーマニア（ルーマニア）

北にウクライナ、北西はハンガリー、北東はモルドバ、南はブルガリアと国境を接し、東は黒海に面している。国の中央をほぼ逆し字のようにカルパティア山脈が横たわっている。ルーマニアは伝統的に農業国で、第一次産業人口が人口の42.3%を占める（2001年）。主食は小麦とトウモロコシが基本、それ以外では豆類も栽培されている。小麦はパンに、トウモロコシは粗く挽いて粉にして粥のように煮てから牛乳とバターを混ぜ込み、ママリガにして食べる。見かけは多少黄色味の強いマッシュポテトに似ていた。



ママリガ（上）とロールキャベツ

<ルーマニア革命>

「バルカンの小パリ」の冠をもつ首都ブカレストは、歴史的な建物が建ち並び、その間を多くの車が行き交っていた。世界のどこにでもある街の風景であるが、今から27年前、チャウシェスク大統領が共産党本部のバルコニーから演説している映像を思い出す。その最中、圧政に苦しむ群衆が政権打倒を求めて、暴動を起こし銃撃戦となった街である。身の危険を感じた大統領は屋上からヘリコプターで脱出。反体制派勢力は共産党の反チャウシェスク派と共に結成した「救国戦線評議会」が権力を掌握し、テレビ、ラジオ局を支配下に置き、チュシェスク夫妻を拘束してしまう。しかし、大統領の親衛部隊が、大統領府だった宮殿と共産党本部を繋ぐ秘密の地下道を通して市民への攻撃が続いた。親衛隊による大統領奪還計画が伝えられる中、「救国戦線評議会」は事態を収めるため、大統領夫妻を臨時軍事法廷にかけ、55分のスピーチ審議で、大量虐殺と不正蓄財の罪で死

刑を言い渡し、即座に銃殺刑を執行してしまう。この様子が逐一テレビで世界中に流された。凄惨な映像がまだ多くの日本人に残像として残っており、ルーマニアと聞くと生々しく蘇ってくる。

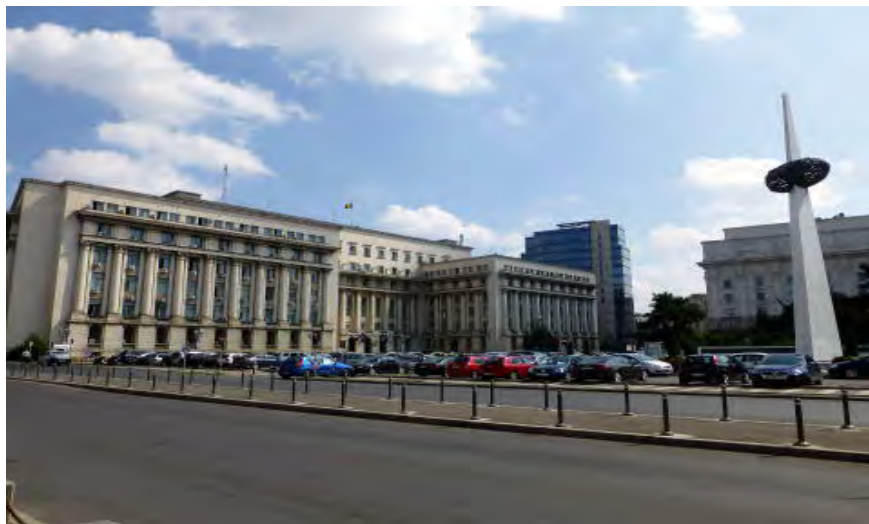
ヴィクトリア通りの革命広場は、石畳の広場を取り囲むように旧共産党本部、旧秘密警察、大統領府として利用されていた宮殿、カルロ 1 世騎馬像、ブカレスト大学図書館、慰霊塔などが建ち、多くの犠牲者を出した革命の舞台である。もう一つの重要な役割を果たしたのがルーマニア国営テレビ局である。救国戦線評議会はテレビ局を占拠し、ブカレストの現状を全国の人々に伝えることで、一般市民は現実には何が起きているのかを知り、ひるむことなく行動できたという。

放送局入口横に犠牲者を悼む木製の慰霊碑が建っていた。革命広場に比べれば余りにも小さく、目立たず、ひっそりとしていた。チャウシェスク大統領は 1960 年代から 80 年代にかけての 24 年間、ルーマニア共産党の独裁者として君臨した。彼は「国力とはすなわち人口なり」として、人口増加政策を実行した。法律で人工中絶を禁止し、5 人以上子どもを産んだ女性は公的に優遇され、10 人以上は「英雄の母」の称号が与えられた。また、上昇しつつあった離婚率にも目を付け、大きな制約を設けて一部の例外を除いて禁止した。その結果、人口増加に転じたが生活苦からの育児放棄が増え、孤児院に引き取られる子どもが増えるという新たな社会問題が生じた。これらの子どもたちは栄養不足から病気がちになり、死亡するケースが増えた。その場合、孤児院の職員の給与が減らされたという。病気治療として大人の血液を輸血する方策がとられたが、これによりエイズに感染する子どもが激増した。

こうした人口政策で発生した孤児たちは「チャウシェスクの落とし子」と呼ばれ、ストリートチルドレン化するなど、ルーマニアの深刻な社会問題となり、日本でも大々的に報じられた。ルーマニア人によると、病院の最上階を子どもたちに開放し、今日でも対処し続けているという。



革命広場



旧共産党本部

＜国民からかけ離れた「国民の館」＞

ブカレストで最も有名なのに、最も人気のないのが「国民の館」だという。独裁者チャウシェスクが、野望と欲望を満たすために建てた代物である。全景をカメラに収める場所探したが、敷地内からは大きすぎて無理。正面前の自由大通りを隔てて 28 mm のレンズでようやく収まった。

内部の見学ツアーはパスポート預かりで、やや厳しい手荷物検査を受けた後、職員の案内のもと赤い絨毯を踏みしめて始まった。会議室だ、劇場だ、映画館だ、大ホールだと案内された床、階段、壁や柱は、白やアイボリーホワイトや茶褐色で統一された大理石で、全てルーマニア産だという。天井や窓枠は金で飾られ、入口の扉はマホガニーで仕上げられていた。公開されているのは極一部で、3,000 余の部屋が、全てこんな調子だという。建物全体に湯水のごとく税金をつぎ込んだ証だ。シャンデリアは各部屋を飾っていたが、大きいものだけで 28,000 個、エレベータが 49 基、全館の照明を使うと、国民 30 万人分の消費量に相当するという。館内に敷き詰められている絨毯はどれ位になるのか予想もつかない。余りの大きさのため、現場に織機を持ち込んで作業したものもあるという。

革命が起こった時、館の完成まであと一歩という段階だった。野望の館にチャウシェスクが住むことはなかった。血税を私利私欲に使われた国民にとってはどうしても好きになれない負の財産だ。2007 年、ルーマニアは EU に加盟した。経済状態は EU 最低レベルだという。スローガンに「我々はとりあえず自由を手に入れた。次は幸福を手にする番だ」が見られた。



国民の館全景

<為政者と国民との距離>

「国民の館」2 階の音楽室のテラスから、まっすぐ伸びる大通りが望める。街路樹が茂る統一大通りで、館を起点に 4 km、幅 110m で、パリのシャンゼリゼ通りを真似て造られたという。この通りを真っ赤なフェラーリを走らせていたのが、大統領の次男、ニクだったことが知られている。セキュリティが張り付き、10m おきに警察官が配備されたという。ニクは、時には飲酒運転、交通事故そしてレイプなどの犯罪行為に走ったが、罪に問われることなどなかったという。彼に人生を狂わされた女性がいた。1976 年、モントリオールオリンピック体操で 10 点満点をたたき出し、金メダルを獲得した「白い妖精」、ナディア コマネチである。命からがらオーストリア経由でアメリカに亡命したのが、革命の 1 ヶ月前のことであった。

40 年ほど前、シリア、ダマスカスで現アサド大統領の父親、7 年前、モスクワでプーチン大統領を乗せた車が通り過ぎるのを見た。一般車両は交通止め、前後左右を車でガードされ、見るからに頑丈そうな黒い大型車が疾走して行った。通りの両側は、何事かと集まった野次馬で埋め尽くされていたが、国を治める人との距離は無限に離れていた。あの時と似た光景が繰り返されていたのだろう。

＜国家プロジェクトの化粧品＞

ルーマニアの旅でチャウシェスク夫妻が国民から反感を買う悪行の数々を見聞してきた。何か良い行い、国民から有難がられていることはないのかの問いに、即返ってきたのがアンチエイジングの化粧品の開発だった。そう言えば、ルーマニアのお土産の中に、アンチエイジングクリーム、しわ取り、しわ伸ばし、しわ予防クリーム、ジェロビタールH3が取り上げられている。社会主義時代からある商品で、国家プロジェクトと進められた産物だという。

歴史に残るアンチエイジングというか、不老不死といえ、中国を史上初めて統一した秦の始皇帝が絶大な権力を背景に、あらゆる手を尽くして不老長寿の薬を探し求めた話が有名だ。人は一度権力を手にすると、不老不死を追い求めるようだ。21世紀になってもルーマニアには、独裁者チャウシェスクの遺産としてアンチエイジングを研究する施設が稼働している。ブカレストから車で20分程のオトペニに、アンチエイジングで世界最先端の研究機関のルーマニア国立加齢科学研究所があると聞いた。



「老化は病であり、治療することができる。若さは年齢だけでは決まりません。年を重ねただけでは、人は老いません。人は常に発展しつづける生き物です」（初代所長：アナ アスラン）。この主旨のもとチャウシェスク大統領が情熱を注いだとされる施設で、大統領夫人、エレナが「不老不死の薬の開発を命じた」とされている。研究所には世界中から多くの有名人、ハリウッドの女優、西側諸国の大統領や芸術家などが見えたというが、「有名人が来た際は秘密警察が厳重に警戒にあたり、ごく限られたスタッフ以外は遠くから見ることにすら禁じられた」と語られている。そして、1989年の革命で多くの資料が散逸してしまい詳細は解らないままだといわれているが、研究所内を飾る贈答品などからその一端を知ることができるらしい。

ブカレストでアンチエイジング効果があるというクリームは、薬局の他にもスーパーマーケットで手に入る。箱一つ一つが盗難防止ベル付きのパッケージに入れられていた。白地に青文字、明るい紫地に金文字など、周囲の商品から浮き出るほど目立って並んでいた。山形県内からもガイドにクリームの注文が直接入るといふ。日本に隠れファンが結構居るようだ。パソコンによると、日本で輸入している化粧品が、薬九層倍で不思議なほど高いのに驚いた。

＜岩塩坑＞

日本には存在しない岩塩坑があることを知り、多少無理しても足を伸ばすことにした。スラニク岩塩坑はトランシルヴァニア山脈の南斜面で、ブカレストから北へ90 km。公共の交通機関だとブロイエシュティから電車かバスを乗り継いで…となるので、車をチャーターした。

ブラショフから南に、トランシルヴァニア山脈に向かう道は素朴な田舎道だった。途中、紅葉が目を楽しませてくれたが、黄色が圧倒的に多く、赤を欠くので日本の美しさには遠く及ばない。10月末、1,200mの峠を越えたが、1,000m以上には積雪があった。山脈を越えた南側は、羊が群れをなすのどかな丘陵地帯が波打っていた。

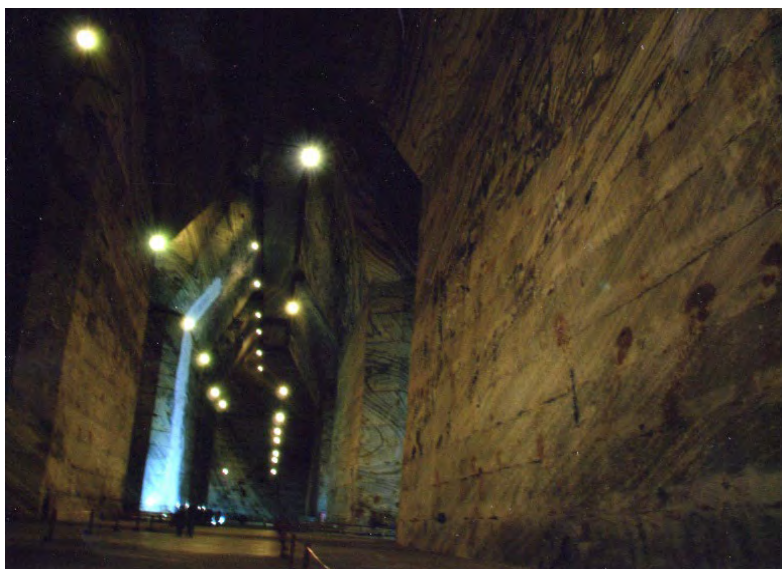
スラニク、正式名はスラニク ブラホバで、駐車場の正面に地下に降りるエレベータの櫓が、シン

ボルのように聳えており、見るからに鉱山街の雰囲気漂っていた。ここで岩塩採掘の歴史は古く17世紀に遡るといふ。岩塩塊が露出しており、各地へ塩の道が通じていたと聞く。見学が可能な坑道は1938年から採掘が始まったというが、採掘後の洞窟はヨーロッパでも最大規模だといふ。

汚れたマイクロバスがやってきた。運転手の服装は、使い古した坑道内での作業服、長靴で、作業員運搬車輛の感があった。時間にして20分程、地下205mの坑道入口まで運んでくれた。重い扉を開き、長い廊下状の先には巨大な地下洞窟が広がっていた。天井の高さ56mはとんでもない高さだ。幅も似たり寄ったりで、外からは想像もつかない規模だった。

塩鉱内の地図を見ると、坑道というか洞窟は、基本的には四角形だが、途中の出入が激しく巨大な地下迷路だった。距離にて優に3kmを越えるが、のんびりと一周することにした。気温は年中一定で11~12℃。内部には塩鉱で使用した道具の展示、採掘法説明はじめ、塩の彫刻、医療用のベッド、ブランコやシーソー、滑り台などの遊戯具、卓球台やバレーボールコートなどが揃った総合施設だった。ルーマニアに埋蔵されている岩塩は、全人類が消費する塩の100年分に相当するといふ。10数年前に旅したボリビアのウユニ塩湖を思い出した。120km×100km、四国の半分が塩である。要するに見渡す限り白い塩の原であった。想像を超える風景、「自然の神秘」に我を忘れてボーとしていた。

この空洞7.8haは、人間が掘ったものであり、掘り出された塩の量は見当もつかないが、人間が利用したことは確かである。どこまで行っても壁も、天井も、床も塩、塩、塩である。内部の空気は湿っぽく、心なしか藻の匂いの様な感じがしないでもなかった。塩の殺菌力にさらされた空気が呼



吸器系疾患に効くらしく、そこに居るだけで治療になるという。鉱山で働く人々の間に見られる肺結核が、岩塩坑の鉱夫たちにほとんど見られないことから、数世紀も前から健康に有益であることを知っていたという。今では多くの国で天然の塩洞窟に診療所が造られているという。坑道内小さな売店があったが、食塩はなく5kgほどのブロック販売だった。

＜交通マナー＞

信号のない交差点で横断歩道渡ろうとすると、乗用車やトラックは勿論、バスもピタリと止まる。その確率は120%だった。100を超えた20%は、あの車の後に渡ろうと思い横断歩道に近づくと、見過ごすつもりで車がスピードを落とし、余裕をもって止まる。そして、お先にどうぞ！の仕草を何度か目にした。また、大通りを横断する時、中央分離帯で立ち止まるとことは皆無だった。横断してくる人を見て、反対車線の車が一斉に止まる。何か車に申し訳ないような気になることもしばしばだった。「おもてなし」をモットーとする日本で、横断歩道で歩行者を見て止まる車は20%を

下回るといふが、地方都市鶴岡では、徒歩あるいは自転車で横断しようとしても95%以上の車はスピードを落とすこともない。

何故、東欧を含めヨーロッパの国々では、歩行者といふか交通弱者優先が浸透しているのだろうかと思えてきた。回答は単純明快だった。警察の目が、横断歩道や交差点で特に厳しいのだという。歩行者に危ない思いをさせるような停車は罰金という厳罰主義だった。同時に、厳罰主義を受け入れ歩行者に笑顔を返す心の余裕を見ていると文化の成熟度の表れにも思えてくる。取締りで徹底するのなら、日本でも道路交通法を厳しく適用して欲しい。「ネズミ捕り」と揶揄されている速度違反取締まりより、交通弱者に不親切な運転の取締りの方が間違いなく歓迎される。車優先のシンボリックな存在で、交通弱者に大きな負担を強い、都市景観を損ねている歩道橋は不要になる。そういえば、ヨーロッパでは歩道橋を目にすることはない。地下横断歩道は所々で見かけたが、昇りには短いエスカレーターが必ず設置されていた。

<トランシルヴァニア地方> — プレジュメル要塞教会

国のほぼ中央を逆L字のようにカルパティア山脈が走っており、山脈の内側、即ち北西部をトランシルヴァニアと呼んでいる。ルーマニア領になったのは20世紀に入ってからだが、ローマ帝国、ハンガリー、ハンガリーとオーストリア帝国の支配、更にはオスマン トルコの侵入があったところで、それぞれの民族による言語、宗教、生活様式が残っており、ルーマニアでは珍しい地域だといふ。

西ヨーロッパから見ると辺境の地であり、キリスト教とイスラム教の境界でもあった。度々、オスマン トルコ軍をはじめイスラム教徒に襲われた地域である。中世にこの地を支配していたハンガリー王は、ドイツ系住民のザクセン人を移住させている。勿論、経済活動を目的とした移住だったが、異教徒からの侵略に備える最前線だったため、教会を中心に要塞化へと徐々に造り替えていくようになる。高い壁に囲まれ、戦略的な目的から見張り塔や武器庫を備える。更に、数ヶ月の籠城にも耐えうるように食糧庫や家畜小屋を設け、学校施設まで整えたところがあったといふ。それぞれの村々が徹底した守りを固めて抵抗した証である。壁を厚くシアパートのような住居にしたところもあり、ドイツ人の建築技術の高さを知ることができるといふ。

同じ要塞でも日本の城は、土農工商のうち、土のみを守るために造られており、一般市民の農工商は何の保護もされていない。いざ戦となれば、城に籠るのは土のみだった。といふのも、日本の戦は、土の攻防が全てで、一般市民にとっては治める人が替わるだけで、戦とは直接的には関係なかったからといえる。もし、戦の間に一般市民に酷い略奪、暴行殺人行為などがあれば、統治者になった時に市民の心は離れてしまう。

ところが、ヨーロッパや中国などの大陸の戦は、異民族の侵入、戦があれば、一般人といえども男は皆殺し、女と子どもは奴隷、財産は全て略奪されるという前提で城、要塞が造られた。要は、異民族同士の戦いは、日本の侍同士の戦いでお終いといふ生易しいものではなかった。

トランシルヴァニア地方には、このような要塞教会は、17世紀までに300も建造された。1993年にハンガリー系の人々が築いた村と、1999年、ドイツ系の人々が築いた6村落をまとめて世界遺産に登録されたのが「トランシルヴァニアの要塞教会の村落」である。中世前後の趣を残し、保存状態が良く、比較的大型なものが選ばれているようだといふ。ブラショフから15 kmと比

較的近いプレジューメル要塞教会に足を運んだ。正面入口を見ると、外壁に付け足したような感じで出っ張っていた。中に入り奥に進むと、屋外に出てしまい外壁が現れた。高さ 10m を越す外壁をくり貫いた通路があり、途中に鉄柵が降ろせるようになっていた。通路は直進すると質素な教会、左右の外壁に向かうと、壁の内側は 3 階建ての集合住宅になっていた。住宅の間の通路から外壁の内側に入られ、一周できるようになっていた。城壁内部は狙撃エリアで、至る所に敵を狙い撃ちする穴、外側になるほど狭くなり、内側の打ち手は動き易く、敵からは狙いにくい造りの狭間があった。なかには、鉄砲連射装置ともいうのだろうか、銃を 5 丁並べられるようにつくられた溝があり、外壁を登ってくる敵への石落としや油霧の穴などもあり、正に要塞だった。



<ドラキュラ伝説> — ブラン城とポエナリ城

ルーマニアという思いだすのが、ルーマニア革命、その少し前の「白い妖精」として全世界から注目された女子体操選手のコマネチであり、もう一つ有名なものにドラキュラ伝説がある。ドラキュラは、昼は地下室の棺で眠り、夜になると獲物の人間を求めて徘徊し、生き血を吸う。このモデルが実在していたのだ。彼が住んでいたのがルーマニア、トランシルヴァニア地方の街、シギショアである。小高い丘の上で森に囲まれた旧市街は、古い城が建ち並び、中世そのままの街並みが保存されていた。「ルーマニアの宝石」とも呼ばれる美しい街で、1999 年に世界遺産に登録されている。

15 世紀この地を治め、オスマン トルコ軍と戦って、ルーマニアの独立を守った英雄がヴラド公爵、別名ヴラド ツェペシュである彼はこの地で生まれ、育った。生家は、建物が残っているだけでなく、未だに現役でレストランとして利用されていた。ヴラド ツェペシュはあだ名で「ツェベッシュ」は串刺しの意味だという。オスマン トルコとの戦いで、捕虜を生きたまま串刺しにし、1 列に並べて見せしめにしたこと由来するという。また、ヴラド公爵の父親も凶暴で知られ、悪魔公爵と呼ばれていた。悪魔の子はルーマニア語で“dracula”で、これを英語読みすると「ドラキュラ」となり、ヴラド ツェペシュがドラキュラのモデルになったのだという。



ドラキュラ城のモデルとなったブラン城

19 世紀、アイルランドの小説家、ブラム ストーカーが、ヴラ公爵がおこなった捕虜への残虐行為にトランシルヴァニア地方に伝わる墓場から甦る男の話をミックスさせて「ドラキュラ」という小説を書き上げた。従って、ドラキュラとは、小説に出てくる吸血鬼の名前であり、吸血鬼の意味ではない。観光名所としてブラン城が、「ドラキュラ城」として知られているが、ヴラ

ド公爵の叔父にあたるミルチャ公爵が住んでいたところで、ヴラド公爵のものではないし、居住もしていない。小説「ドラキュラ」で、ドラキュラ城のモデルとなったところである。

ブラン城は、攻めてくるオスマン トルコ軍をいち早く発見するため建てられたもので山頂に聳える城砦である。内部は迷路ようになっており、ドラキュラが出てきてもおかしくない雰囲気だが、観光客の行列が途切れることがなかった。

本物のドラキュラ城はトランシルヴァニア山脈中を流れるアルジェシュ渓谷沿いの山頂 2,033m にあった。城の起源は、13 世紀までさかのぼるポエナリ城である。その後、城名も居住者も変わり廃墟となる。15 世紀、ヴラド ツェペシュが城の必要性を知り、構造を強化して主要な要塞の一つに仕上げて、根城としていた。渓谷沿いの道から城までは 1,500 段の急な石段を登らなければならなかった。人里離れた絶壁の上で、城の前にはヴラド ツェペシュが考えたというリアルな串刺し人形が 2 体あった。時折り霧が流れる様は如何にもドラキュラ城の雰囲気を漂わせていた。雨降りにもかかわらず、息を弾ませ登ってくる人が絶えなかった。



＜ルシュノフ要塞＞

もう一つの要塞教会、ルシュノフ要塞は山の上にあった。その姿は威風に満ち溢れていた。13 世紀頃にドイツ人によって建てられたものだという。外壁の内部には、教会を中心に 30 以上の家屋と、学校もあり、まるで 1 つの村落の感があったが、飲み水はどうやって確保したのだろうか。聞くとところによると、オスマン トルコ軍の捕虜 2 人に、「水源を探し当てたら、釈放する」と約束し、見つけたという。近年になって改修工事が進み、内部には当時の壊れかけた馬車や生活用品や工芸品が展示されていたが、お土産店に並ぶ品々の方がはるかに目を引いた。要塞からの見下ろすルシュノフの街の地割が気になった。道路に面して隙間なく石、レンガ造りの家が建ち防護壁の役割を担っていた。家屋の後ろには畑と緑地があり、家畜を飼育ができるような造りで、一区画単位で一つの要塞であった。



ルシュノフ要塞は近年まで個人所有だったため、世界遺産指定からは漏れているが、当時は堅固な要塞教会も分厚い防壁に囲まれ、見張り塔があり、生活の場の部屋があり、大きな貯蔵庫を備え、祈りの場もあり、日本の城下町のミニチュア版だった。

【資料】 旧ユーゴスラビア紛争

旧ユーゴスラビアはバルカン半島にあった国。交通の要地のため歴史的に相対立する二つの勢力が複雑に錯綜する特殊な地域で、抗争が絶えなかった。例：東ローマ帝国と西ローマ帝国、

ビザンチン文化とカトリック文化、イスラム教とキリスト教、トルコとゲルマンの対立などである。大きく見れば、オリエント文明とヨーロッパ文明の接点であり、つい最近までは社会主義体制と資本主義体制が鋭く対立していた。

この複雑な地域に 1918 年、東ヨーロッパ諸国と共に社会主義国家ユーゴスラビアが誕生した。1 つの社会主義連邦国家、2 つの文字、3 つの宗教、4 つの言語、5 つの民族、6 つの共和国（スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア）、7 つの国境と複雑極まりなかった。1980 年「建国の父」チトーが亡くなると国の「タガ」が外れてしまう。共和国間の格差から民族自治要求 1980 年代東ヨーロッパ民主化のうねりの中で潜在していた民族主義のエネルギーが一気に噴出、対ソ連で団結していた国民意識が冷戦終結でバラバラになる。さらに民族感情や宗教の対立が激しくなる。1991 年クロアチアとスロベニアの分離独立を皮切りに、旧ユーゴスラビアは 5 つに分裂（クロアチア、スロベニア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、新ユーゴスラビア連邦-セルビア・モンテネグロ）し、足掛け 4 年に及ぶ内乱に発展する。2006 年セルビアとモンテネグロに分離独立で、6 つの共和国に分離独立する。後にコソボ自治州がセルビアから独立し、7 つに分裂して今日に至っている。